

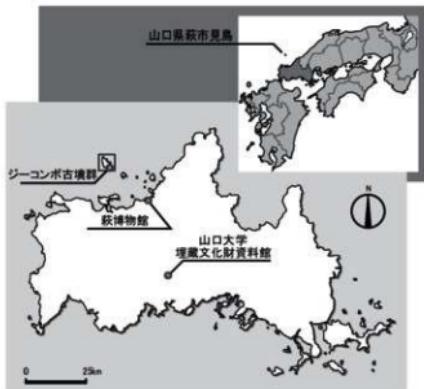
見島ジーコンボ古墳群
第 128・137 号墳出土資料調査報告

2015

山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群

第128・137号墳出土資料調査報告



2015

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区(山口市:吉田地区・白石地区、宇部市:小串地区・常盤地区、光市:光地区)は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示、データベースの構築など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは当館設立以前に本学教員等により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料に対し、当館は展示等で活用を図って参りましたが、平成22年度より収蔵資料の継続的な調査研究を推進するため、「館蔵資料調査研究報告書」の刊行を開始いたしました。

平成25年度から26年度にかけては、国指定史跡『見島ジーコンボ古墳群』第128号墳および第137号墳から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料の調査を実施しました。本書は、その調査報告となります。見島ジーコンボ古墳群は、全国的に著名な古代の墳墓遺跡であるにもかかわらず、調査後実に半世紀以上もの間、出土品の全貌が公開されませんでした。当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけられるものです。本書が考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた萩博物館をはじめ関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

山内 直樹

例言

1. 本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年にわたり、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する「ジーコンボ古墳群」発掘調査成果の再整理調査報告である。
2. 上記の調査で出土した資料は、萩博物館（山口県萩市城内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。本書に所収するのは、第128号墳および第137号墳出土資料である。
3. 両館所蔵出土資料の確認および整理作業は、横山成己(山口大学埋蔵文化財資料館助教)、乃美友香(山口大学事務局情報環境部総務係技術補佐員)が行った。資料の実測については横山が行った。写真撮影は横山が、図面・整図は横山・乃美・石丸恵利子(山口大学事務局情報環境部総務係教務補佐員)が平成25年4月～11月まで)が行つた。なお、萩博物館における調査に関しては、第137号墳出土資料は平成26年1月29日から2月7日にかけて、第128号墳出土資料は平成26年5月12日から6月5日にかけて行つた。
4. 第137号墳の測量調査は、平成25年7月24日から25日にかけて横山と右丸が行つた。
5. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の金属器類については、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会による予算配分を受け、(株)吉田生物研究所に委託し保存処理を行つた。
6. 本書の執筆と編集は横山が行つた。
7. 本書を作成するにあたり、下記の方々に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。
柏本 秋生 横山 尚樹 清水 満幸 萩博物館各氏 (株)吉田生物研究所
山口大学事務局情報環境部総務係

凡例

1. 本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。
2. 見島ジーコンボ古墳群の略号を「M J」で表記している。第128号墳は「M J 128」となる。
資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類に「H」、鉄製品に「Hf」、銅製品に「Hbr」、
山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類に「Y」、鐵器類に「Yf」、銅製品に「Ybr」の
略号をそれぞれ付して識別している。
3. 遺物図の縮尺については、以下のように統一している。
上器…1/2 金属器…1/2
4. 遺物の実測図は、下記のように分類した。
断面黒塗り……須恵器、金高器
断面白抜き……土師器
5. 土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色軸』(1976)に準拠した。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅱ章 第128号墳の調査	4
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第128号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第2項 鉄製品	
第Ⅲ章 第137号墳の調査	35
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第137号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第2項 鉄製品	
第Ⅳ章 まとめ	51

挿図目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境	22
図1 見島見島遺跡分布図	3
第二章　第128号墳の調査	23
図2 見島ジーコンボ古墳群分布図	5・6
図3 第128号墳石室実測図	9
図4 第128号墳床面出土器実測図①	12
図5 第128号墳床面出土器実測図②	13
図6 第128号墳石室内出土山上上器実測図	17
図7 第128号墳石室外・その他出土土器実測図①	21
図8 第128号墳石室外・その他出土土器実測図②	
図9 第128号墳石室外・その他出土土器実測図③	
図10 第128号墳山上鉄製品実測図	29
第三章　第137号墳の調査	39
図11 第137号墳石室実測図	39
図12 第137号墳石室内出土土器実測図①	41
図13 第137号墳石室内出土土器実測図②	42
図14 第137号墳石室外出土土器実測図	47
図15 第137号墳石室内出土鉄製品実測図	47

写真目次

第二章　第128号墳の調査	36
写真1 第128号墳調査時① 前の様子	7
写真2 第128号墳窓口部現況	8
写真3 第128号墳現況	8
写真4 第128号墳床面出土土器①	14
写真5 第128号墳床面出土土器②	15
写真6 第128号墳石室内表土	18
写真7 第128号墳石室外・その他出土土器①	24
写真8 第128号墳石室外・その他出土土器②	25
写真9 第128号墳石室外・その他出土土器③	26
写真10 第128号墳石室外・その他の出土土器④	27
写真11 第128号墳石室外・その他の出土土器⑤	28
写真12 第128号墳出土土鉄製品	30
写真13 第128号墳出土鉄製品X線画像	30
第三章　第137号墳の調査	37
写真14 第137号墳石室石室調査前	36
写真15 第137号墳石室調査後	36
写真16 第137号墳	36
写真17 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区	37
写真18 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区	37
写真19 見島ジーコンボ古墳群第137号墳現況	37
写真20 第137号墳石室内出土土器①	43
写真21 第137号墳石室内出土土器②	44
写真22 第137号墳石室内出土土器③	45
写真23 第137号墳石室外山上土器	48
写真24 第137号墳石室内出土鉄製品	49
写真25 第137号墳出土鉄製品X線画像	49

表目次

第二章　第128号墳の調査	50
表1 第128号墳出土遺物(土器)観察表	31
表2 第128号墳山上遺物(鉄製品)観察表	34
第三章　第137号墳の調査	51
表3 第137号墳出土遺物(鉄製品)観察表	49
第四章　まとめ	
表5 昭和36年(1961)見島ジーコンボ古墳群	
調査行程	

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3km離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6km、東西約2.5km、島周約24.3kmを測り、総面積はおよそ7.8km²となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山（標高181m）が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周囲には僅かながら冲積低地が形成されている。それぞれに本村・寧津の集落が発達し、現在でも島への数少ない山入り口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島幅を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の焼台山南麓から、木村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤（横浦海岸）に立地している。

第2節 歴史的環境

1. 遺跡の分布状況（図1）

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言つても過言では無からう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年（1960）から同37年（1962）まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島總合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「樂師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が見島本村遺跡（図1の1）、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が堅田遺跡（図1の2）、「片尻の遺物散布地」が片尻遺跡（図1の6）、「草谷の遺物散布地」が草谷遺跡（図1の7）、「船戸の遺物散布地」が船戸遺跡（図1の9）、「船見山の遺物散布地」が船見田遺跡（図1の10）、「大竹の遺物散布地」が大竹遺跡（図1の11）、「瀬山の石器発見地」が瀬田遺跡（図1の3）に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年（1916）に土師器壺2点と硬土製勾玉1点が出土したとされ、昭和35年の合同調査においても土師器壺4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかつたのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である要害山城跡（図1の4）、高見山城跡（図1の5）に関して言及されていない。また、平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1kmの丘陵上に

土壘・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている(図1の8)。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

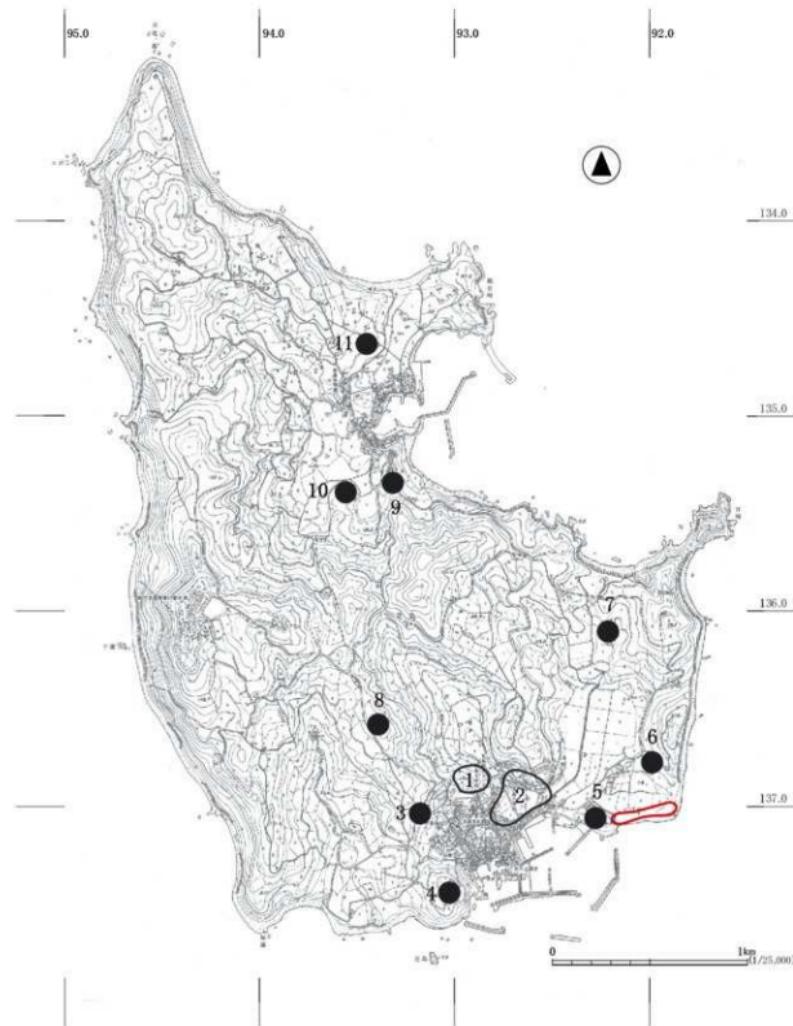
前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鉛が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年(1989)発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年(1960)より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地(図1の3)で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であったが、昭和45年(1970)に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される十器片が、昭和59年(1984)には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錐、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡(図1の2)内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の上器片が出土しているが、その総量はさして多くないようである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の十器師、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、構造の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけ、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあるが同地域に聚落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

- 1) 地理的環境は文献8による。
- 2) 竹藤・野野(1964)の400~402頁。
- 3) ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年(1923)に二輪善之助氏によってなされている(二輪1923)が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山山頂遺物が紹介されている。
- 4) 今岡調査前半である昭和34年(1959)に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古墳址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻(中村・田中1989)では、本村・北西斜面のみのぼし山(要害山:標高130m)山上に土壘・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の假名が付されているが、埋蔵文化財包含地名としては「要害山城跡」が用いられている。
- 5) 人正15年(1926)に実施された山高郡上東研究会による見島の調査報告(医田ほか1927)には見島小学校敷地(現:見島総合センター敷地)にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地について、昭和10年(1935)の山本博氏の報告(山本1935)には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは言じがたいものであり、現在資料の所在も不明瞭であることから『萩市史』では確實な資料として認めていない。



国指定 史跡 見島ジーコンボ古墳群

- 1 見島本村遺跡 集落跡（縄文～中世）
- 2 墓田遺跡 散布地（縄文～古代）
- 3 瀬田遺跡 散布地（弥生）
- 4 要寄山城跡 城館跡（中世）
- 5 高見山城跡 城館跡（中世）
- 6 片尻遺跡 散布地
- 7 草谷遺跡 散布地
- 8 要寄山城跡 城館跡（中世）
- 9 船戸遺跡 散布地
- 10 船見田遺跡 散布地
- 11 大竹遺跡 散布地

萩市(1971)『萩市地形図』(国土総務省地図)を転載・加工

図1 萩市見島遺跡分布図

第1節 昭和36年の現地調査

昭和35年(1960)から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査では、初年次が分布調査に当たられており、第128号墳は、古墳群西部城を調査の対象とした2年次の昭和36年(1961)に発掘調査の手が加えられている。第128号墳の出土資料は、現在となっては経緯不明であるが、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。遺物袋に同封されている注記カードを確認すると、

【萩博物館】

- 萩①「見島ジーコンボ古墳群 128号 第27岡-3」
- 萩②「見島ジーコンボ古墳群 128号 第27岡-4」
- 萩③「見島ジーコンボ古墳群 128号 1961.9.4 床面」
- 萩④「見島ジーコンボ古墳群 128号 棺内表上中 19610903」
- 萩⑤「見島ジーコンボ古墳群 128号 撥乱層 19610903」
- 萩⑥「見島ジーコンボ古墳群 128号 棺外 19610903」
- 萩⑦「見島ジーコンボ古墳群 128号 19610903」
- 萩⑧「見島ジーコンボ古墳群 63MJ128号」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

- 山①「見島 128号 表土 棺外 S.36.9.2」(コンテナNO.31 袋NO.1)
- 山②「見島 128号 表土 (棺外) S.36.9.2」(コンテナNO.32 袋NO.12)
- 山③「見島 128号 表土 (棺外) S.36.9.2」(コンテナNO.34 袋NO.20)
- 山④「見島 128号 床面 S.36.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.17)
- 山⑤「見島 128号 棺内 床面 S.36.9.4」(コンテナNO.31 袋NO.20)
- 山⑥「見島 128号」(コンテナNO.32 袋NO.27)

の14枚、日付と出土地点等で大別すると11種の記載が存在することが明らかとなった。以上のカードから調査経過を復元すると、第128号墳の調査は昭和36年9月2日に着手され、表土を除去し石室の輪郭を検出したものと思われる(山①～③)。翌9月3日より石室埋積土の掘削を進めたよう(萩④)、同日中に床面(一部か)を検出したようである(山④)。9月4日は床面精査と諸記録作業が実施されたものと推定される(萩⑤・山⑥)。

注記カードの中で、萩⑤の「撹乱層」と萩⑧「63MJ128」はやや理解に苦しむ。萩⑤は9月3の日付であり、撹乱されていた石室内埋積土と想像されるが、石室内堆積土の可能性も否定できない。萩⑧の「63」は「昭和36年」もしくは「(19)61」を誤記したものであろうか。

今まで遺構実測原図や調査日誌等、当時の調査記録が発見されていないため、『見島総合学術調査報告』に記載された第128号墳の調査成果報告文と、調査時の写真(写真1)を転載するとともに、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第26図 第128号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図3)を掲載する。

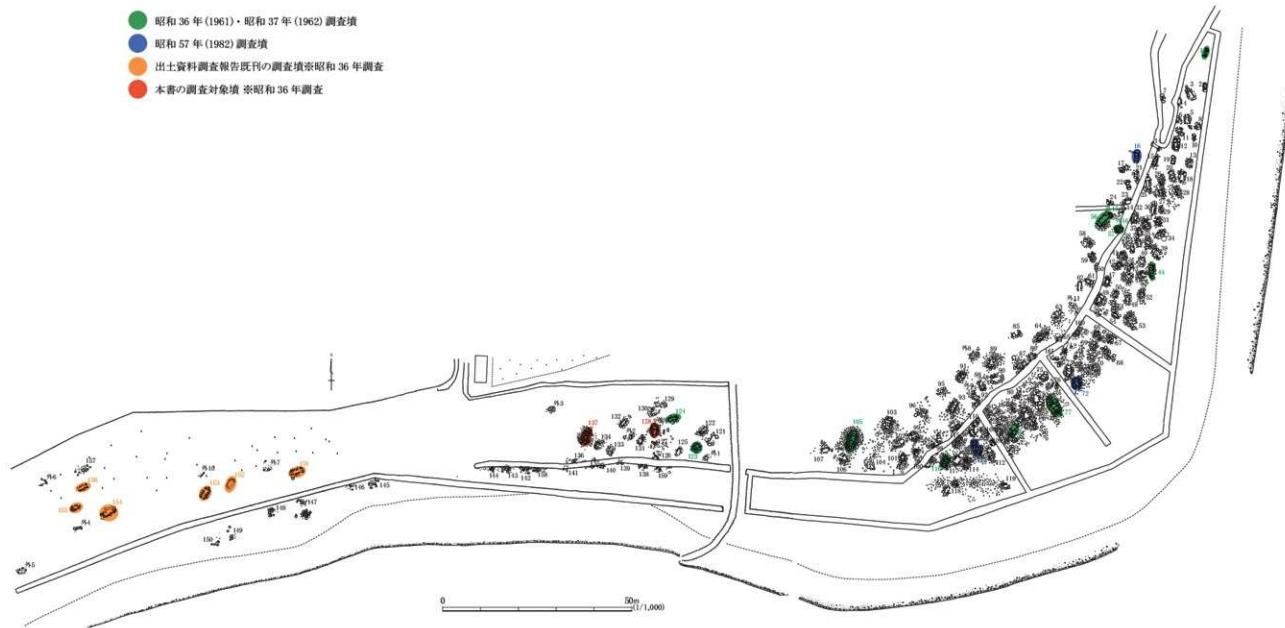


図2 見島ジーコンボ古墳群分布図



写真1 第128号墳調査時開口部の様子（南から）
森藤・小野 1964[図版22(上) 第128号墳]を転載

第128号墳 第123号墳の西北西約10メートルの地点にあって、この付近にも石室が多く、第124号、第127号第130号、第131号墳の石室と2、3メートルしか離れていないほど密集している。埴堤の底上付近に当る点に立地し、側石の上部から上が露出している。天井石は1箇だけ遺存し、横石は取り除けられて石室の周辺に残存するにすぎない(第26図、図版22)。

奥石には1箇の自然石を用い、側石は東側11箇、西側9箇で、大部分横積みに1重あるいは2重に積んでいるが、なかには縦に組んだものもあって、径10~35センチ入の小石塊を盛って入口をふさいでいる。方位はS19°Wで、奥行330センチ、高さ65センチを測る。床面は径2、3センチ大の砂利を敷く疊床で、非常に長く、右室の高さが低いところに特色がある(第26図、図版22)。

人骨は保存が悪く、小さな断片になっていて、奥壁に近い付近から中央迄までの間に比較的多く散在していた。副葬品には盡の後片4個体分と壺坏、壺の破片や1箇分の土師器の盤を検出している。これらの副葬品のうち、土師器に比べて須恵器が多く、



写真2 第128号墳開口部現況（南から）※2012年12月撮影



写真3 第128号墳現況（西から）※2012年12月撮影

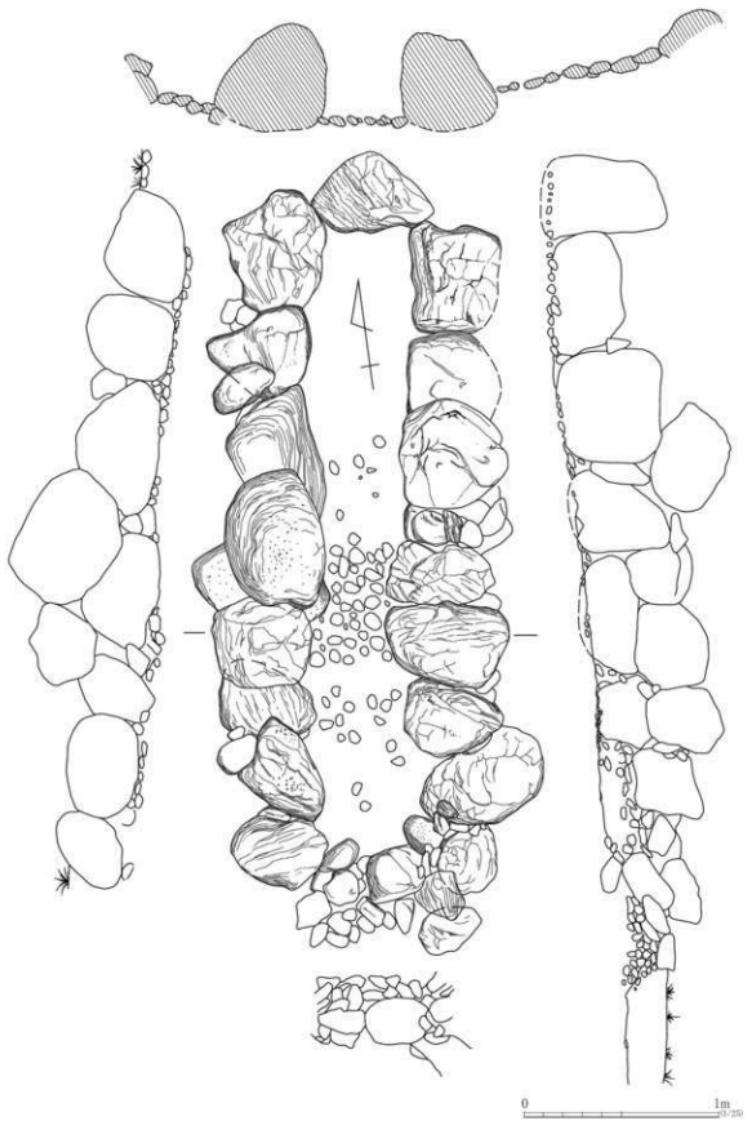


图3 第128号墓石室实测图

それらはほとんど石室の入口付近から出土した。なお、石室の内部から個体分の人の頭骨と下顎骨が出土した。

他に、鉄錆片が発見されて、4片からなっているが、4本分と見なされる。いずれも握手の尖端式のものである。

須恵器片は130片。土師器の細片は数片。厚手の須恵器片は外面格子目をのこす例(第24-1)を除いて、他はすべて平行条印き目をのこし、内面はほとんど青海波をうめる。わずかに同心円が見られる例(同図-2)もある。

手は被せ式の蓋の破片(同図-3・4)と坪の瓶片と思われる。断片から見たところでは、蓋には擬宝珠状の彫みのあるものが多く、坪はすべてへら起しの手底で付け高台のあるものもある。

石室内の塗上中からも290片の須恵器片が出土したが床面出土のものと同種のものばかりであった。

土師器片は細片のみであるが、丸底の坪の破片と思われる。

(『見島総合学術調査報告』427-429頁)

第128号墳は北東から南西方向に広がる古墳群のほぼ中央に位置しており、石室25基(第121~144号墳、第158~159号墳)、石室状構造物3基(外1~3)が密集して構築されている(図3)。調査時に西部域の1基に數えられたが、石室の分布を見ると、西方の140番台後半以降の石室群とはやや距離を隔てており、両者間は石室構造や開口方向も異なるものと理解される。

報告によると、石室は浜堤の頂上付近に設けられており、側石の上部から上が露出していたとされ、調査時と史跡公園化された現況はほぼ同様の景観を示していたものと思われる(写真2・3)。ただし、調査時に1石しか確認されなかった天井石は、現在3石が架されている。

石室構造に関しては簡単に触れられているのみであり、奥壁には自然石1石、左側壁(東側壁)は11石、右側壁(西側壁)は9石で、大部分横積みに1重あるいは2重に積んでいるとされるが、平面図を見ると左壁立面図として描かれる奥側1石口は奥壁と考えられ、下段5石、上段5石の遺存が確認される。11石とされるのは、平面図左側壁開口部に描かれたやや大ぶりな石を側石としてカウントしたものと想像される。右側壁は下段7石、上段2石が遺存している。調査時に遺存した犬井石は、写真を見ると左側壁上段第1石と右側石下段第3石と上段第1石(いずれも奥壁より)に架されていたようであり(写真1)、現在復元されている開口部側第1石がこれに該当する(写真2)。

石室規模は奥行330cmとされ、幅に関する記述がないが平面図から40~50cmと推定される。開口部の方位はS19°W。高さは65cmであり、西部域西側の石棺状石室(第151~156号墳:高さが45~54cmに推定)に比して高く構築されている。側壁下段石材の選択や据え方は明らかに上段の構築を意識しており、石棺状石室とは基本的な構造が異なっている。『見島総合学術調査報告』では第128号墳を石棺状石室のBII類に分類しているが、B I・II類間の構造差は看過できない。

床面は2、3cm大の礫床とされるが、平面図や写真では5~10cm大の礫が敷かれていたように見える。

第2節 第128号墳の出土資料

第1項 土器類

第128号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分存保管されている。今回の調査で両者が接合した場合は、これまで通り萩博物館に収蔵していただくことになった。

前述の通り、遺物の注記カードは14枚11種が存在する。ここでは、床面出土資料(萩③・山⑤)とその他の資料が接合した場合は、元米床面に存在した可能性が高いことから「床面出土」とした。同様に棺内表土中(萩④)と床面以外のその他の資料と接合した場合は、石室内に存在した可能性が高いことか

ら「石室内表土出土」とした。このほか、明確に石室外と見られる資料(萩⑥・山①～③)、出土場所の特定が不可能な資料(萩⑦・萩⑧・山⑨)は「石室外・その他」として報告をおこなう。

【床面出土】(図4・5、写真4・5、表1)

須恵器坏、坏蓋、皿、直口壺、甕が存在する。以下に概要を記す。

H1は坏蓋。3/4を欠失するが、完形復元可能な資料である。平らな天井部から湾曲して口縁に降下する。口縁端部は尖り気味に丸く收める。天井部中央にはつまみが剥離した痕跡があり、剥離面に同心円の刻みが施されている。調整は外面全面に回転ナデ、内面口縁から天井部1/5まで回転ナデ、他は不定方向のナデが施される。天井-口縁境界の稜線で径を復元した。なお、接合資料に床面出土品はないが、同一個体が萩③に含まれるため床面出土に含めた。H2も坏蓋の天井-口縁部片で、口縁部の1/4が遺存する。『見島総合学術調査報告』第27図4が当資料に該当し、さらに4片が接合した。やや高めの天井部から湾曲気味に口縁に降下し、口縁端部は丸みを帯びた鳥嘴状に下垂させる。調整は外面は回転ナデ、内面は口縁部が回転ナデ、天井部は直線的なナデが施されている。H39と同一個体の可能性がある。明確な床面出土の根拠はないが、『見島総合学術調査報告』に記述された「須恵器片は130片～」は床面上出上資料数を示すと思われる事から、ここに掲載する。H3も坏蓋。低く扁平な天井部からわずかに降下し口縁に移行する。口縁の外方への屈曲も弱い。端部は鳥嘴状に下垂させる。調整は口縁部のみ外面回転ナデ、天井部は不定方向のナデが施される。『見島総合学術調査報告』第27図3が当資料に該当し、萩⑤1点と接合した。H2と同様の理由で床面出土とする。H4は坏蓋天井部片。口縁境界部と天井部中央つまみ接着部付近で折損している。調整は口縁境界付近が内外面回転ナデ、他は不定方向のナデ。H5は扁平な天井部に擬宝珠形つまみを有する坏蓋天井部片。萩③單体の資料である。外面は灰を多く被る。H6は坏蓋口縁部片。外方に開かないタイプの口縁で、端部は丸みを帯び下垂させる。萩③單体資料。H7も坏蓋口縁部片。口縁下端をわずかに拡張させる。全体的にシャープなつくりで、調整は外面とも回転ナデを施す。

H8は高台付坏。坏部の大半を欠失するが、完形復元可能である。坏底部や内側に、外方に張り出す長い高台が付く。坏体部は強く内湾しつつ直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く收める。調整は、内面口縁から底部外方は回転ナデ、内底は不定方向のナデが施される。外面は口縁から体部が回転ナデ、底部付近はカキ目状の回転板ナデが施される。高台から底部外方は回転ナデ。萩③と山⑨の接合品である。H9～H11は坏口縁部片。H9は器壁が厚く、皿の可能性もある。内外面に回転ナデが施されるが、外面残存部下端には及んでいない。萩③單体資料。H10は口縁一体部片。体部は緩やかに内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く收める。口縁外面は重ね焼きにより黒色化しており、縁に緑色の自然釉が溜まっている。H11は瓶口氣味に外反する口縁部片。口縁端部は丸く收める。H12は底部から口縁部まで遺存する坏。平底の底部から外方に開きつつ直線的に体部が立ち上がる。口縁端部は丸く收める。口縁内面下端に沈線を1条巡らせる。

H13とY1は接合しないが、調整および焼成具合から同一個体と判断できる。口径に比して器高が低い個体であり、口縁内端を肥厚させる。底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。外面稜線にて径を復元。

H14は直口壺の口縁・体部片。やや算盤珠状に胴部が張り出す体部に、短い口縁が付く。内面および口縁外面は回転ナデ、体部外面はカキ目が施される。

H15は器壁の薄いつくりの中型の甕。口縁の成形はシャープであり、口縁外端に凹線を1条巡らせ、下端を断面三角形状に肥厚させる。口縁は内外面とも回転ナデを施し、体部外面には右下がりの平行叩き痕が、内面には放射線状に压痕が残る弧状格子文當て具痕が残る。岡化したのは萩④・萩⑧・山

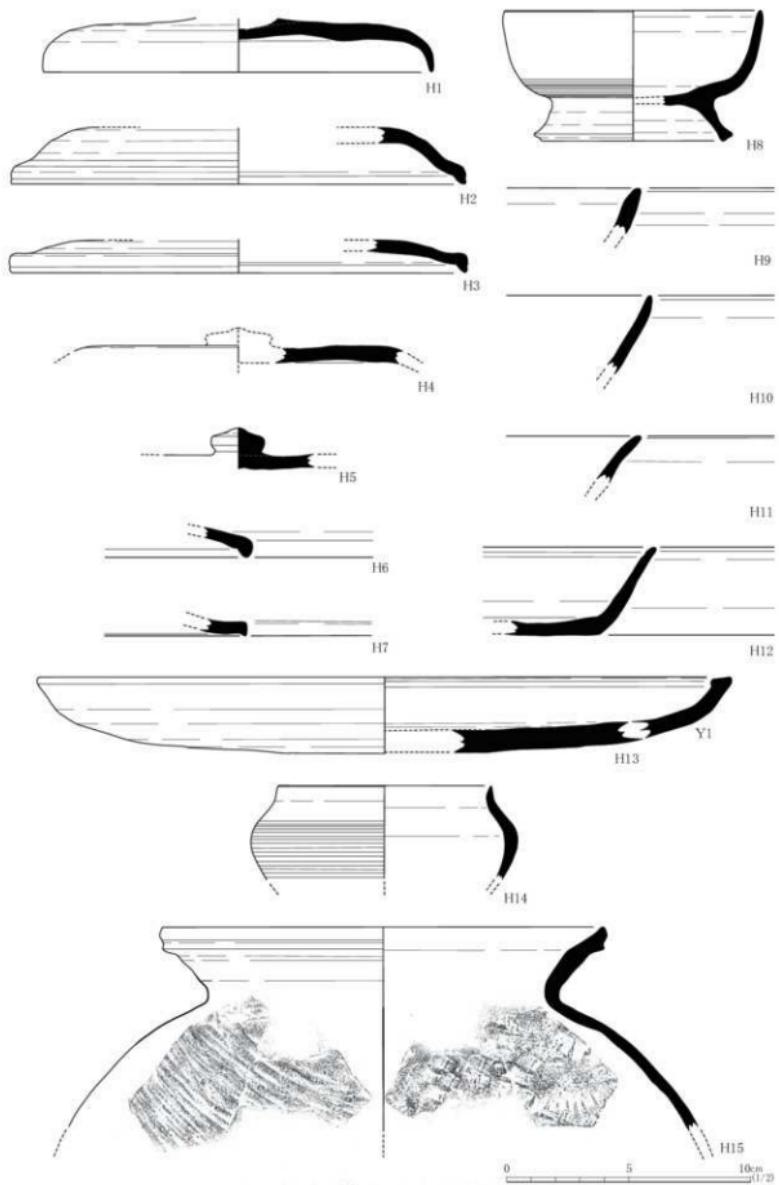


図4 第128号墳床面出土土器実測図①

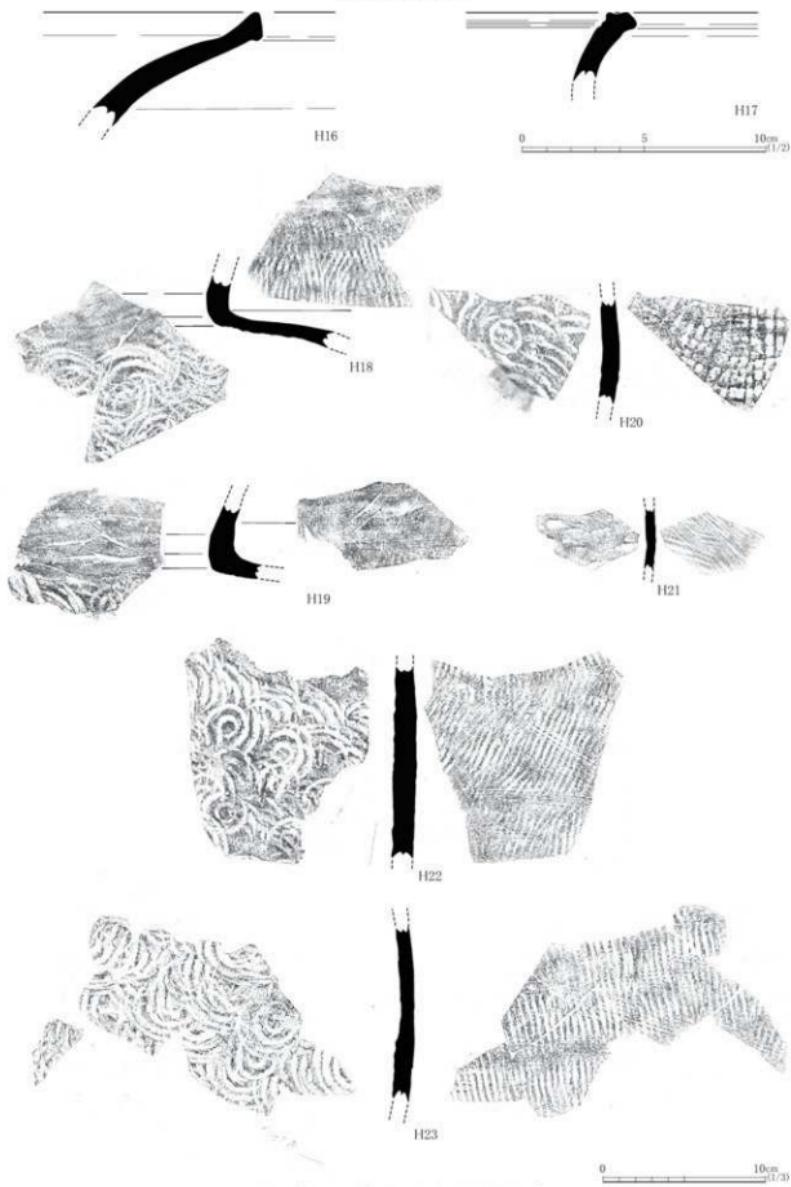


図5 第128号墳 床面出土器実測図②

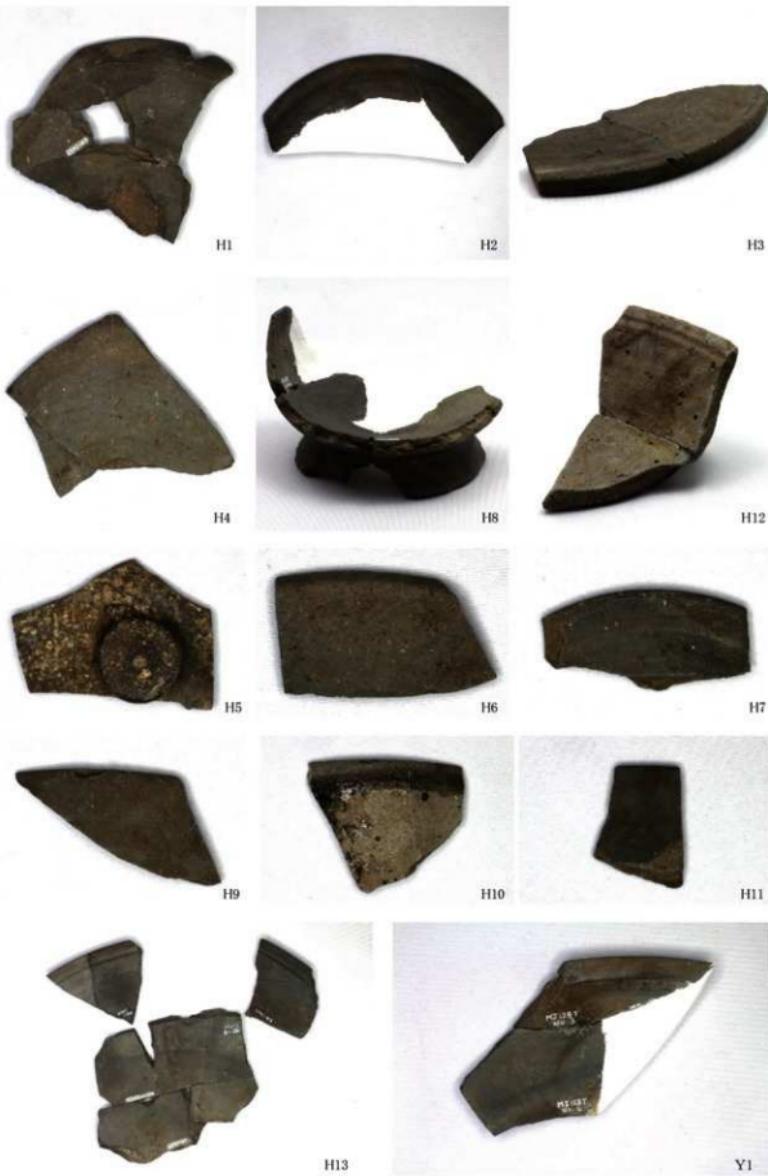


写真4 第128号墓 床面出土土器①



写真5 第128号墳床面出土土器②

③の接合資料だが、同一個体の破片が萩⑧にも見られるため床面出土に含ませる。H16とH17は窓口縁部片。H16は口縁が外方に大きく開く個体であり、内外端部を肥厚させる。外面には回転ナデが施されるが、内面は多量に灰が被っており調整不明である。H17は軽く外反する口縁部片で、口縁内面に小さな突帯を1条巡らせている。H18～H23は窓頭部または体部片である。H18とH19は体部外間に縱方向の平行叩き、内面に同心円當て具痕が残り、頭部外面には灰が多く被る。器壁の厚みが異なるが同一個体の可能性がある。H20は体部片で、外面に格子叩き、内面に同心円當て具痕が残る。『見島総合学術調査報告』第27図1に該当し、H11・2と同様の理由で床面山上と見なすが、遺物注記内容は萩⑧である。ということは、萩⑧は全て床面または石室内出土品なのであろうか。H21はH15と同一個体と見られる。H22は外面に平行叩き後に横および斜め方向にカキ目を施し、部分的に横方向に指でナデ消す。内面は同心円當て具痕をそのまま残す。H23はH22と同一個体と見られるが、接合資料中の1片が『見島総合学術調査報告』第27図2（遺物注記内容：萩⑧）である。

【石室内表土出土】（図6、写真6、表1）

國化可能資料はごく少量であり、全て須恵器で器種には壺、壺蓋、皿、盃が存在する。

H24は壺蓋。口縁部域の大半を欠失しているが、完形復元可能な資料である。ドーム状の天井部から内湾しつつ緩やかに降下し口縁部に至る。口縁端部は下垂させ丸みを帯びる。天井部にはボタン状つまみが付くが、中央よりややずれて付けられ、焼き歪みも大きい。口縁端部の焼成具合から、壺蓋を重ね焼いたことが分かる。H25は全体の約1/2を欠失するが、完形復元可能な資料である。H24とほぼ同形の壺蓋だが、天井部がやや扁平化している。天井部にボタン状つまみが付くが、これも中央からややずれている。口縁端部の下垂はH24に比してやや鋭い。調整は口縁部内外面が回転ナデ、天井部も内外面回転ナデが施されるが、さらに不定方向のナデが加えられる。内面に重ね焼かれた痕跡を残すが、復元径11.3cmと壺口縁部口径としては小さく、裏返された蓋に高台付壺が重ね置かれたのであろう。H26も焼き歪みのある壺蓋の口縁一天井部片。断面実測ポイント以外では天井がドーム状に膨らむ。口縁は斜め外方に緩やかに降下し、口縁端部も同方向に下垂させる。内面と口縁外間に回転ナデ、天井部外間にナデを施す。口縁外間に重ね焼きの痕跡である自然釉が被るが、焼成時に大きくなれたようである。H27も約3/4が欠失する壺蓋の口縁一天井部片。扁平な天井部から緩やかに下降し口縁に至る。口縁端部はほぼ垂直に下垂させ、尖り気味に収める。口縁部のみ内外面に回転ナデが施される。類似形態の壺は、第151号墳に3点（MJ151H31～33）見られる（横山・松浦2012）。H28は口縁端部と天井部中央が欠失している壺蓋。ややドーム状の扁平な天井部から緩やかに口縁に降下する。口縁端部は遺存しないが、ほぼ垂直に下垂するタイプと見られる。天井部中央につまみが存在した痕跡が残る。口縁部は内外面回転ナデ、天井部の外面中央付近は回転ナデ、外方はナデが施され、内面は直線的な指ナデが施される。H29は壺蓋ボタン状つまみ。第128号墳上壺蓋とは接合しなかった。H30は器壁の厚い個体で、器種を特定できないがここでは壺蓋としておく。天井部外面外方に手持ちヘラ削りが施されている。

H31は高台付壺の底一体部片。底部外縁や内側に、断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は内縁で接地する。体部はほぼ開かずに立ち上がる。H32は無高台の壺で、平底の底部から体部は開き氣味に直線的に立ち上がる。内面全面と口縁一体部は回転ナデ、底部外縁はヘラ起こし後ナデが施される。

H33は皿。底部と口縁部は接合しないが、胎十と焼成具合、調整から同一個体と見なした。平底から緩やかに内湾して立ち上がる器形で、口縁端部は丸みを帯び外縁を肥厚させる。

H34は蓋の底一体部片。底部外縁に外開きの小ぶりな高台が付く。体部はあまり開かず、明瞭な肩部を形成する。内外全面に回転ナデが施されるが、体部外縁下位はヘラナデが施されているようである。

第II章 第128号墳石室出土土器実測図

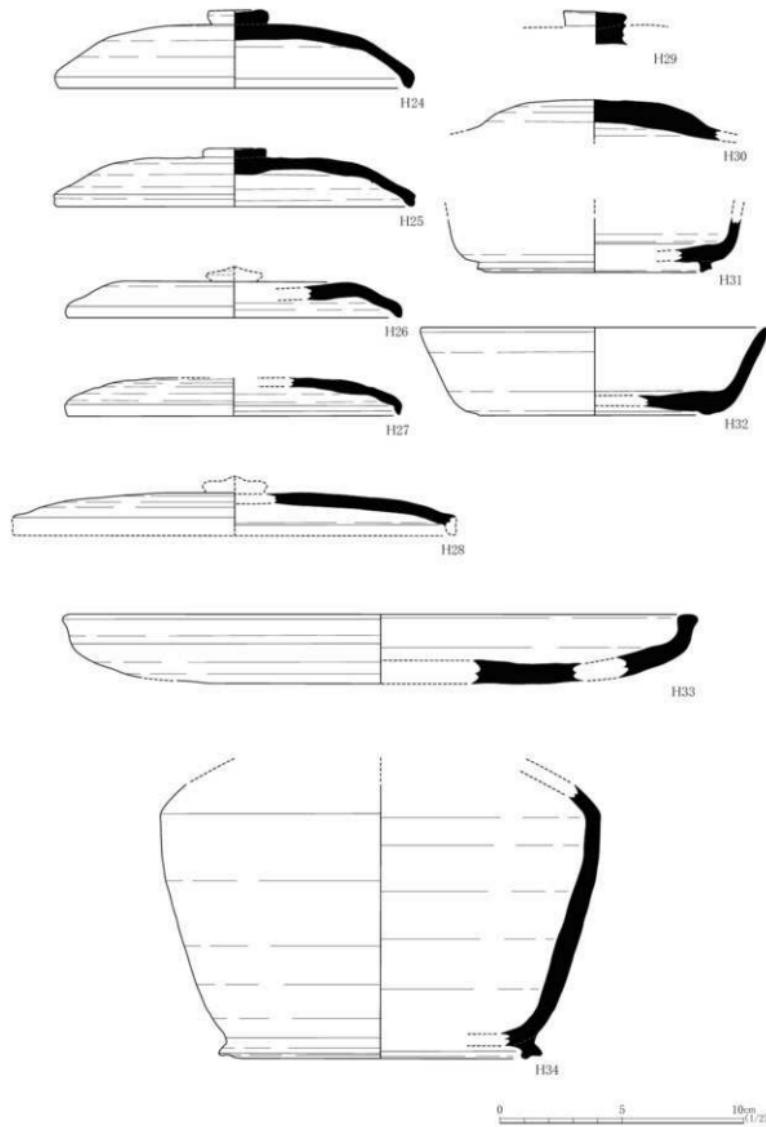


図6 第128号墳 石室内表土出土土器実測図



写真6 第128号坑 石室内表土出土土器

【石室外・その他出土】(図7~9、写真7~11、表1)

前述したとおり、ここでは明確に石室外から出土したもの(萩⑥、山①~③)、出土地点が不明なもの(萩⑤・⑦・⑧、山④・⑥)で、床面および石室内表土上出土資料とは接合しない、もしくは同一個体と見なせなかつたものを報告する。

多量の土器資料が存在するが、図化可能な土師器は1点のみで、残りは全て須恵器である。須恵器は坏、坏蓋、壺が大多数を占める。

H35は1/2を欠失するが完形復元可能な坏蓋。低いドーム状の天井部から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁端部は鳥嘴状に外方に下垂させる。天井部にはボタン状つまみが付く。歪みの大きな個体で、残存部でも完全には口縁が接地しない。調整は口縁のみ内外面回転ナデを施す。H36も低いドーム状の大井部から内湾して口縁に下降する坏蓋であるが、器壁が厚く、H35と異なり口縁は屈曲して開く。口縁端部は短く下垂せる。口縁内面は灰が多く被っており、焼成時、裏返しの状態で坏が重ね置かれたものと推測される。H37は扁平な坏蓋天井部片。天井と口縁の境界に明確な稜を形成する。口縁端部は欠失する。大井部外面中央につまみが剥離した痕跡を残す。外面全面に回転ナデ、内面は口縁部に回転ナデ、天井部に不定方向のナデを施す。H38もH37と同様天井一口縁の境界で屈曲するが、口縁はやや内湾気味に下降する。天井部中央と口縁端部を欠失する。外面は口縁に回転ナデ、天井にナデを、内面は口縁から天井外方にかけて回転ナデ、天井中心部は直線的に指ナデを施す。H39は復元口径19.4cmの大型の坏蓋。大井部は大きく凹み、大きく内湾しながら口縁に下降する。口縁は軽く外反し、端部を鳥嘴状に下垂させる。比較的シャープな成形で、口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデが施される。H40は低いドーム状の天井から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁は外方に強く開き、端部はほぼ垂直に下垂させる。口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデを施す。Y2は胎土、焼成状況などから見てH36と同一個体である可能性が高いが、接合せず器形もわずかに異なる。焼き歪みによる違いであろうか。Y3はシャープな成形の坏蓋口縁部片。口縁を強く外反させ、口縁端部は鳥嘴状で垂直に下垂させる。焼き膨れが生じており、口縁外面の灰被り状況から正置した状態で上に坏が重ねられ焼成されたものと思われる。H41は約1/2を欠失するものの完形復元可能な坏蓋である。器壁の厚く扁平な大井部から屈曲して口縁に下降する。口縁の外反はわずかで、やや内向きに端部を下垂させる。下端に面をとることが特徴と言える。天井部にはボタン状つまみが付くが、中央からずれている。口縁外面に灰が被るのはY3と同様の状況であったためと考えられる。口縁部内外面に回転ナデ、天井部は外面がヘラ起こし後ナデ、内面は不定方向の直線的なナデが施される。Y4は坏蓋天井部で報告するが、坏の可能性もある。天井部外面に窓体と見られる砂が多く付着する。H42は扁平な坏蓋天井一口縁部片で、扁平な天井から屈曲気味に口縁が聞く。天井部中央と口縁端部は欠失する。口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデが施される。他に同一個体と見られる萩⑤と萩⑥の接合品も存在する。H43は扁平な天井部を有する坏蓋の天井一口縁部片。口縁は軽く外反させ、端部を鳥嘴状に下垂させる。焼き歪みが大きく、口縁遺存部が完全には接地しない。内面は全面に回転ナデを施した後に天井部に直線的な指ナデを施す。外面は口縁部に回転ナデ、天井部にナデを施す。H44も扁平な坏蓋天井一口縁部片。器壁がやや厚く扁平な天井部から緩やかに内湾し口縁に至る。口縁端部を屈曲させほぼ垂直に下垂させる。口縁内面と外面は回転ナデ、天井部内面はナデが施される。器形や胎土、焼成具合からY7と同一個体である可能性が高いが接合せず、口縁内端の処理が異なることから別個に報告する。H27も同形の個体である。H45は扁平な天井部片。H46は坏IIの蓋が、天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井下部は内外面とも回転ナデ、天井部内面にはナデを施す。Y5

～Y7は坏蓋口縁部片。Y5は扁平な天井部からやや屈曲気味に口縁を下降させ、端部をほぼ垂直に下垂させる個体である。シャープな成形で、焼成状況も極めて良好である。口縁端部付近のみ回転ナデ、他は外面ナデ、内面は直線的なナデを施す。H47は器壁のやや厚い扁平な天井部から、わずかに内湾して口縁に下降する。口縁は軽く外反させた後に端部を下垂させる。口縁端部内外面は重ね焼きにより変色しており、その状態から坏上に蓋を裏返した状態で載せ、さらに坏を重ねたものと推測される。H48は口縁を強く外反させ、端部を下垂させ丸く收める。内外面とも回転ナデを施す。Y6は扁平な天井部からそのまま口縁に至り、端部のみ鳥嘴状に下垂させる。口縁部付近のみ回転ナデを施す。Y7は前記したII44と同一個体である可能性が高い資料であるが、当資料は口縁内端を段状に囲ませている。口縁付近のみ回転ナデを施す。H49は低い天井部から内湾して口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く收める。内外面とも回転ナデ。ここでは審査として報告する。

H50とY8は接合しないが胎土と調整、焼成具合から同一個体の高台付坏と判断する。器壁が厚く、丸底気味の底部から内湾して体部が立ち上がる。体部外端には断面方形の小さな高台が付き、内端で接地する。体部はクロ水引き痕が明瞭に残り、口縁は軽く外反させて端部を丸く收める。口縁から体部にかけては回転ナデが施される。H51も高台付坏の底部片。平底の外端に高台が剥離した痕跡を残す。高台径は7cm程度と見られ、小型品である。内外面とも回転ナデが施される。Y9も高台付坏の底部片。底部外端に小ぶりな断面方形の高台が付く。高台は内端で接地する。高台周間及び内底外方に回転ナデが施される。H52は無高台平底の坏。体部は軽く内湾しつつ開き気味に立ち上がり、口縁は軽く外反する。口縁および体部外端と内面全体に回転ナデ、底部外端にナデが施される。Y10も無高台平底の坏底。体部外端は比較的丁寧にナデが施される。体部内外面は回転ナデ。H53は坏の口縁一体部片。底部との境界で折損しているため高台の有無は不明。わずかに外反しつつ直線的に立ち上がる体部を有し、口縁端部を丸く收める。クロ水引き痕が明瞭に残る。残存部は全面に回転ナデが施されている。H63は非常にシャープな成形の個体で、直線的に伸びる体部であり、口縁は尖り気味に丸く收める。外面は口縁端部を除き自然釉がたっぷりと掛かる。残存部は全面回転ナデが施されている。長頸壺の口縁である可能性を残す。H55～61、Y11～13は坏の口縁部片。いずれも小片のため口徑復元不能。口縁がやや内湾するH55を除いてはいずれも口縁が外反する。いずれも他の資料とは接合せず、全て別個体と判断した。調整は全て回転ナデが施されている。この内、H60は古墳群出土品の中では優品で、薄い器壁を有し成形もシャープ、焼成状態も極めて良好である。H62はここでは坏底部としておくが、薄い平底の底部から体部が外方に大きく開き立ち上がるようである。体部外端にヨコハケ状の調整が施されている。

Y14は大きく外反する口縁部片である。内外面とも回転ナデが施される。壺の口縁と見られるが、胎土および焼成具合から見てII31と同一個体である可能性が高い。ただし、第128号墳川上資料の中には他に口縁および頸部の破片が見当たらない。H63は長頸壺の体部片。胴の張る算盤珠状の器形であり、胴最大径部の上位に凹線1条を巡らせる。器壁が薄く成形もシャープながら、焼成不良で酸化している。内外面とも回転ナデが施される。萩⑧に同一個体と見られる体部が2点存在するが、底部および頸部、口縁部は見当たらない。

H64は瓶の底部片か。平底から直線的に体部が立ち上がる。底部外面は未調整、体部外端は回転ヘラ削り後回転ナデ、内面は回転ナデが施されている。

Y15～Y19、H65～70は甕。Y15は口縁部片。大きく外反し、内外端部をわずかに肥厚させる。外面は回転ナデ、内面はナデが施される。胎土および焼成具合からII16とは別個体と判断した。Y16は頸～

第II章 第128号墳の調査

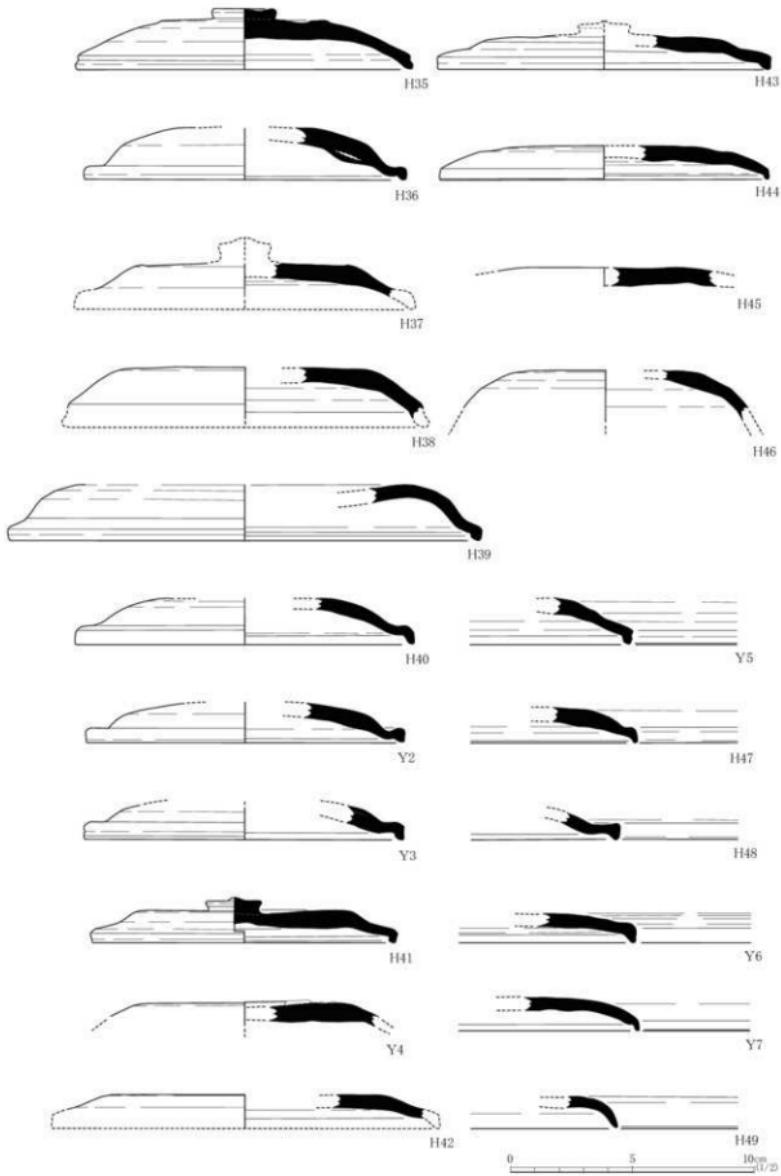


図7 第128号墳 石室外・その他出土器実測図①

第Ⅱ章 第128号墳の調査

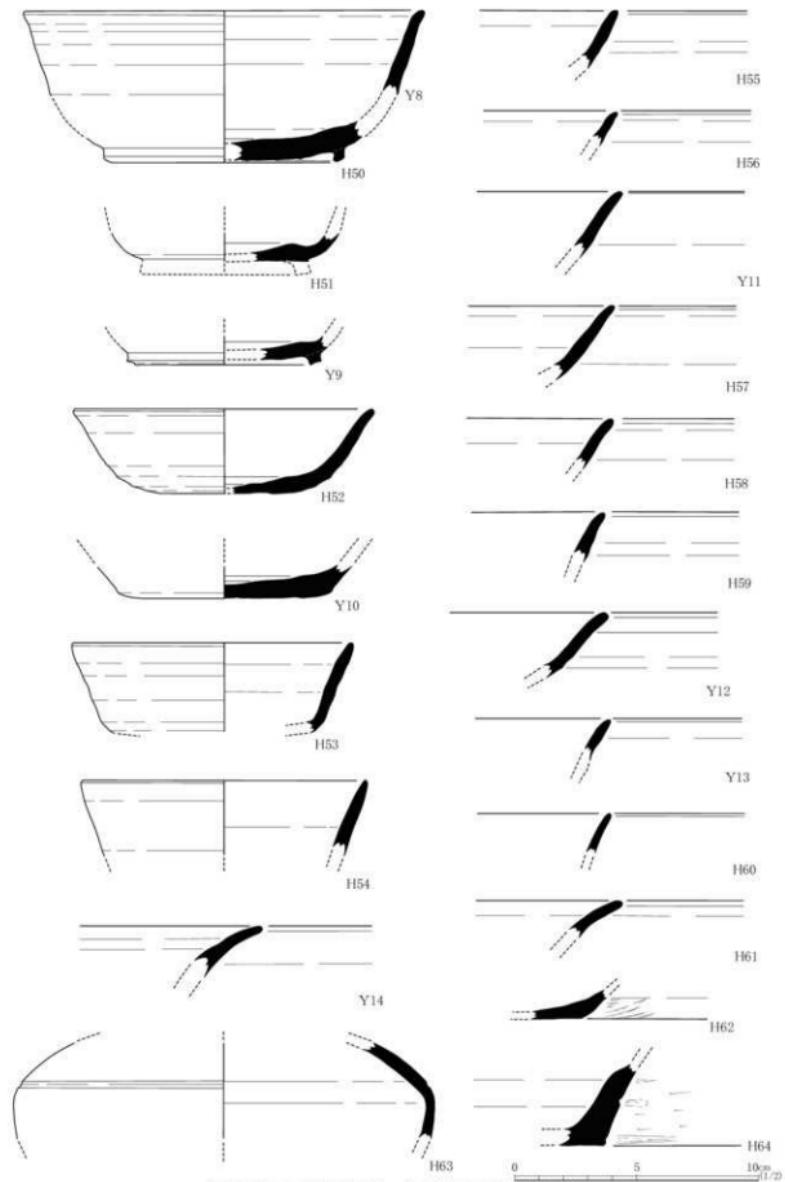


図8 第128号墳 石室外・その他出土土器実測図②

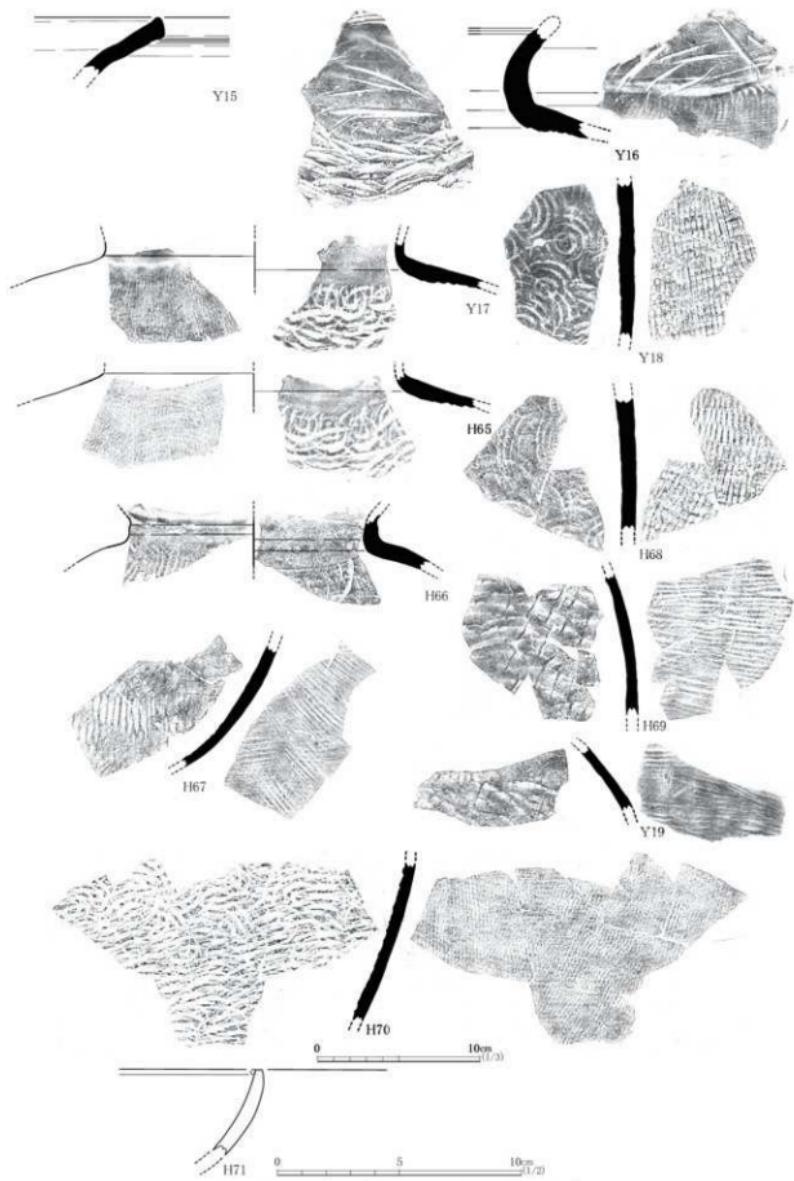


図9 第128号墳 石室外・その他出土器実測図③



写真7 第128号墳 石室外・その他出土土器①



写真8 第128号墳 石室外・その他出土土器②



写真9 第128号墳 石室外・その他出土器③



Y16-1



Y16-2



Y17-1



H65-1



H66-1



Y17-2



H65-2



H66-2



Y19-1



Y19-2

写真10 第128号墳 石室外・その他出土土器④



写真 11 第128号墳 石室外・その他出土土器⑤

体部片。小片のため径の復元は困難であるが、器壁の厚みから大甕と見られる。口縁端部を欠失するが、口縁残存部上端に2条凹線が巡る。外面は風化が著しいものの体部には縦方向の平行叩き後カキ目が施されている。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。頸部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデが施される。他に同一個体と見られる破片が見当たらず、第128号墳に副葬されたとは想定したい。Y17とH65は中型甕の頸一体部片で同一個体である可能性が極めて高いが、接合しない。体部外面には縦方向の平行叩き後カキ目が施されている。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。Y17は肩部の灰被りが頗著である。H66は同じく中型甕の頸一体部片だが別個体である。体部外面に縦方向の平行叩きを施す。内面の同心円当て具痕は後のナデにより不明瞭となっている。頸部外面には円形3つ「○○○」を単位とする工具痕が連続して残る。甕体部片は同一個体の掘藏を避け、特徴のあるものと大きく接合したものを報告する。Y18の外面には格子叩き後カキ目が施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。H68は掲載図上の下位には格子叩きが、上位には縦方向の平行叩きが施されており、内面の当て具痕を見ると平行叩き部裏面のみナデ消しが岡られている。H69は細かな破片の接合資料で、内面の弧状格子文当て具痕が特徴的である。H15・H21・H67と同一個体と見られる。Y19も同一個体と見られるが、他の資料と接合しなかった。H70は体部8片の接合資料。外面に平行叩きを行った後にカキ目を断続的に施す。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。当資料の同一個体と見られるは多数存在する。

H71は出土品中唯一の図化可能な土師器の塊口縁一体部片。小片のため口径復元不能。内湾する体部から上端をわずかに凹ませる口縁に至る。口縁内端は小さく肥厚させるようだが欠失している。外面は横方向に細かくミガキが施されているようである。内面は風化が激しく調整が観察できない。外面の赤色部は繪彩であろうか。

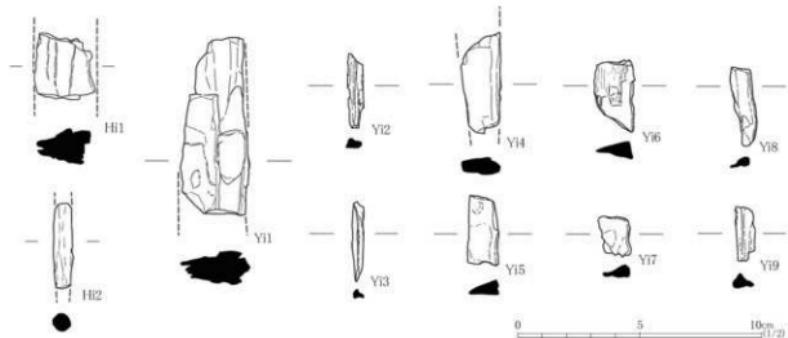


図10 第128号墳出土鉄製品実測図

第2項 金属器類

金属器類も、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分存保管されている。『見島総合学術調査報告』には「鐵鎌片が発見されて、4片からなっているが、4本分と見なされる。いずれも細手の尖根式のものである」という一文が記載される。今回の調査で確認した金属器も鉄製品に限られたが、総数は11点(萩博物館2点、山口大学埋蔵文化財資料館9点)を数える。出土地点を見ると、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品は石室内床面上出土品、萩博物館所蔵品は梶原層および出土地点不明品である。上器同様、表の備考に注記カードの情報を記載しておく。

【鉄製品】(図10、写真12・13、表2)

Hi1は鉄刀刀身部片。小片であるが、遺存状態は比較的良好である。背部は剥離しているものと思われる。出土地点不明。Hi2は尖根系鉄鎌の茎部片。断面は円形に近い。梶原層出土。

Yi1は鉄刀刀身部片。剥離が激しいが、背が一部遺存する。Hi1と同一個体か。Yi2は鉄鎌の茎もしくは頭部片か。図の左辺は原面と見られる。Yi3は尖根系鉄鎌の茎端部片。木質は遺存しない。Yi4は鉄刀または刀子の茎部片と思われる。端部を折損しているが、原面はほぼ残る。Yi5は刀子の刃部か。図の裏面は剥離している。背は原面であるか不明。Yi6は鉄刀の刀身部片と思われるが、断定できない。表面に一部木質が遺存している。Yi7~Yi9は鉄片。小片であり、いずれも鉄刀、鉄鎌、刀子などの断片であろう。これら鉄製品の総重量は125.38gを量る。

以上が第128号墳出土資料の全容である。既往報告の石植状石室(B1類:第151~156号墳)出土資料に比べ、数多くの個体が遺存しているが、残念ながら上器、鉄製品とともに資料の残存状態は極めて悪いと言わざるを得ない。

土器に関しては、蓋に比して坏身の残存状態が著しく悪く、個体数も少ない。身の数を超えて蓋が剥離されたとは考えがたいため、後世の盗掘によるものと思われる。また、小片を含めても土師器は皆無に近い。こちらに関しては、須恵器・上師器の固体強度を考えると、盗掘に原因を求めるよりは元来刷毛されなかったと考えるべきであろう。

鉄製品も少數であるが、今回の調査で鉄鎌以外の存在を確認できたことは大きな成果と言える。

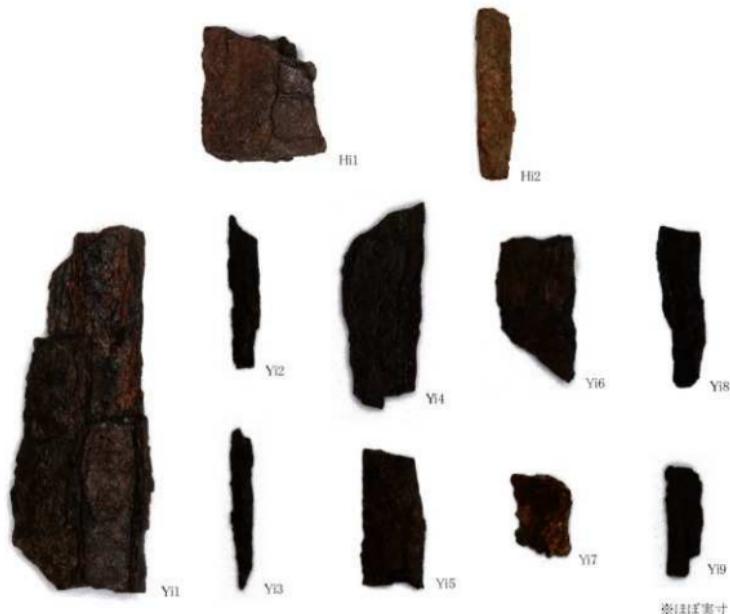


写真12 第128号墳出土鉄製品

※実寸

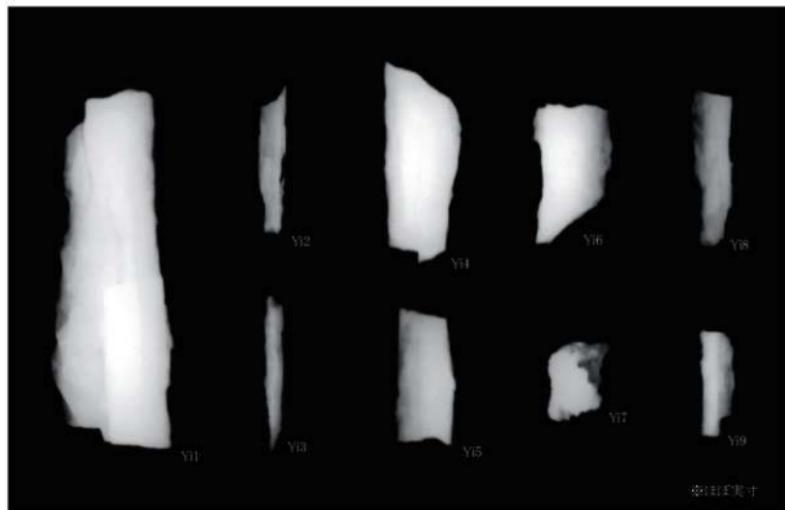


写真13 第128号墳出土鉄製品X線画像

※実寸

表1 第128号坑出土遺物(土器)観察表

萩①~⑤、山①~⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径或底径 ②外高	色調 ①外面 ②内面	胎土	焼成	備考	
								直	斜
H1	床面	栗芯器 片器	完形復元 可能	①(15.9) ③△2.2	①灰色(D5/1) ②灰色(D5/1)	泥	良好	平らな天井部から横面まで口縁に跨る下。口縁部は1.5cm程度 に丸く收められ天井部中央外周につまみが倒壊した跡を残す。 断面高さは同じ円筒形の削除部を残す。 萩①~新④・山①~山④は鋸立で接合しないが同一個体と見 られる可能性があるため重複して記載。	
H2	床面	栗芯器 片器	天井 ~口縁部	①(0.6) ③△2.5	①灰色(D5/1) ②灰褐色(D5/6/1)	泥	良好	やや厚めの天井部から横面まで下にして口縁に至る。口縁部 には横張り下丁場がある。「足品組合字銘刻番号番号印3744に 照應。10cm×10cm×5cmの大きさ。	萩①~新④・山①~山④は重複。
H3	床面	栗芯器 片器	天井部 ~口縁部	①(0.6) ③△1.35	①灰色(D5/1)	泥	良好	栗平底天井部はひざ下に傾く下口縁に至る。口縁の外方への 凹曲部はわずかである。口縁部は天井部に接合せた「足品組合 字銘刻番号番号印3744に照應。	
H4	床面	栗芯器 片器	天井部		①灰褐色(D5/1)	泥	良好	栗平底天井部の外方への凹曲部を有する。	萩平底天井部の外方への凹曲部を有する。
H5	床面	栗芯器 片器	天井部	つまみ修理	①灰色(D5/1) ②灰色(D5/1)	泥	良好	栗平底天井部のひざ下に傾く下口縁に至る。口縁の外方への 凹曲部はわずかである。口縁部は天井部に接合せた「足品組合 字銘刻番号番号印3744に照應。	
H6	床面	栗芯器 片器	口縁部	③△1.2	①灰褐色(D5/1)	泥	良好	外方への凹曲部で開けない口縁部。断面は丸みを帯びて下を下す。 外方への凹曲部で開けない口縁部。断面は丸みを帯びて下を下す。 萩①~新④の資料。	
H7	床面	栗芯器 片器	口縁部	③△0.7	①灰褐色(D4/1)	泥	良好	口縁下部をわずかに下方へ折れさせる。シャープなつくり。 萩平底天井部の資料。	
H8	床面	栗芯器 高台付环	完形復元 可能	①(0.4) 高台径(0.2) ③△0.5	①灰褐色(D4/1)	泥	やや不良	外方へ向かう側面の内側へ凹凸を有する。高台は内側で接 合する。表面は強く内側しつつ直立突起に立ち上がる。 萩①~新④の資料。	
H9	床面	栗芯器 片器	口縁部		①灰褐色(D5/1)	泥	良好	口縁部を引いて、底の可塑性がある。 萩平底天井部の資料。	
H10	床面	栗芯器 片器	口縁 ~全体		①灰褐色(D5/1) ②灰色(D5/1)	泥	良好	やや不良で内側で口縁に至る。口縁部は支柱復元に丸く丸め る。口縁部は横ねじりによる色差化している。緑の自然釉が 少ない。萩平底天井部の資料。	
H11	床面	栗芯器 片器	口縁		①②灰褐色(D5/1)	泥	良好	口縁部は天井部に接合する。口縁部は丸く收める。 萩平底天井部の資料。	
H12	床面	栗芯器 片器	口縁 ~底部	③△5.6	①灰褐色(D5/6/2) ②底色(D5/7/1)	泥	やや不良	半切の近部から全体に外周につつ直通的に立ち上がる。口縁部 は丸く收まる。口縁内側下端に沈澱物を1本吊りす。 萩平底天井部の資料。	
H13	床面	栗芯器 片器	底部	①(28.4) ②(6.0) ③(3.1)	①灰色(D5/1) ②灰色(D5/1)	泥	良好	口縫部に沿って底部が低い底の底部。底部内面に茎ねじかけ た痕跡が残る。Y字接合なし。同個体。	萩①~新④の資料。
H14	床面	栗芯器 底口壺	口縁 ~全体	①(0.7) 解剖最大径(1.1)	①灰褐色(D5/1)	泥	良好	口縫部に沿って底部が低い底の底部。口縫内壁を肥厚させる。 H12と接合なし。Y字接合。他に同一側に見られる口縫部(萩①点)、新 ④(2.0)点)の存在する。	やや粗獲な丸い形體に、短い口縫が付く。 萩平底天井部の資料。
H15	床面	栗芯器 片器	口縁 ~全体	①(18.0)	①灰褐色(D4/1)~ 暗灰褐色(D4/1)	泥	良好	器身が薄い底を有する。口縫部の形成がシャープでくちばし感 がある。口縫外周に凹凸をもつて下。下部を三面扁形状に 肥厚させる。各面には下以下の平行面があり、これは直角形状 で尖端を残す。 萩①~新④の接合部の資料。	
H16	床面	栗芯器 片器	口縁部		①灰色(D5/1) ②底色(D5/1)	泥	やや不良	大きめの外方に開く口縫部。断面は内外両方に肥厚させる。内 面に多角形に底をもつて下。下部を三面扁形状に 肥厚させる。萩平底天井部の資料。	
H17	床面	栗芯器 片器	口縁部		①灰色(D5/1) ②底色(D4/1)	泥	やや不良	軽く外反する口縫部で、口縫内面に小さな断面凹凸の要素 をもつて下。萩平底天井部の資料。	
H18	床面	栗芯器 片器	底~全体		①灰色(D5/1) ②底色(D6/1)	泥	良好	全体部前面には平行面あり、内面には同心円内で其根が残る。H18 と同一個体の可能性もある。 萩平底天井部の資料。	
H19	床面	栗芯器 片器	底~全体		①灰色(D5/1) ②底色(D6/1)	泥	良好	全体部前面には平行面あり、内面には同心円内で其根が残る。H18 と同一個体の可能性もある。 萩平底天井部の資料。	
H20	床面	栗芯器 片器	全体		①②灰褐色(D5/6/2) ②底色(D6/1)	泥	やや不良	内面に格子状の接合部。内面に同心円内で其根が残る。H18 と同一個体の資料。	
H21	床面	栗芯器 片器	全体		①底色(D4/1) ②底色(D4/1)	泥	やや不良	内面の底筋部は丸く膨らむと同一個体と見られる。 萩平底天井部の資料。	
H22	床面	栗芯器 片器	全体		①底色(D4/1) ②底色(D5/1)	泥	良好	外側の天井部のひざ下部に内側して口縫に跨る下。口 縫部は1.5mm厚せず。丸く收める。天井部にボタン状の突起2つを有 するが、天井中央ではなく、ややずれ。横き突起が大なり、裏は 埋められた痕跡を残す。	
H23	床面	栗芯器 片器	全体		①底色(D4/1) ②底色(D5/1)	泥	良好	口縫2つと横突起2つを有する。同個体と見良い。 萩平底天井部の資料。	
H24	石室内 表土	栗芯器 片器	完形復元 可能	①(14.5) ③△2.2 つまみ修理2.5	①灰色(D5/1) ②底色(D5/1)	泥	良好	ノコヘの天井部のひざ下部に内側して口縫に跨る下。口 縫部は1.5mm厚せず。丸く收める。天井部にボタン状の突起2つを有 するが、天井中央ではなく、ややずれ。横き突起が大なり、裏は 埋められた痕跡を残す。	萩平底天井部の資料。

萩①~⑧、山①~⑥の注記は4章参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	出土	焼成	備考
				①(柱棒) ②L.A. つまみ棒2.8	①(4.7) ②L.A. つまみ棒2.8				
H25	石室内 土上	窓櫓部 环甌	完形復元 可能	①(14.7) ②L.A. つまみ棒2.8	①(4.7) ②L.A. つまみ棒2.8	①灰褐色(2.5Y7/1) ②灰褐色(NS)	黒	やや不良	平らな天井部から内側して口縁に下降する。口縁の外側への傾曲(12.8cm)なく。口縁端部は鳥嘴型に下垂させる。天井部にボタシングがある。天井部の内側には、中央に位置しない、内面に直角に椎を打った痕跡の現れ。新3-赤山-赤山-山口山山口山複合。他の同一個体と見られる天井部は複数の被覆(被覆2)が見られる。
H26	石室内 土上	窓櫓部 环甌	完形復元 可能	①(13.8) ②△L.A. つまみ棒2.8	①(13.8) ②△L.A. つまみ棒2.8	①灰褐色(2.5Y7/1) ②灰褐色(2.5Y6/1)	黒	良好	焼き込みが大きい。側体で、一部天井部がリム状に膨らむ部分もある。外縁はほぼ外方に組曲せず、端部は側の外方に下垂する。外縁に膨らみの凹部(自然縫)を複数有する。中央が大きくなっている。
H27	石室内 土上	窓櫓部 环甌	口縁 ~天井部	①(3.6) ②△L.A. つまみ棒2.8	①(3.6) ②△L.A. つまみ棒2.8	①灰褐色(2.5Y6/1) ②灰褐色(2.5Y6/2)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に口縁に下降する。口縁端部は屈曲領域(腰)で膨らむ。外縁に直角に折り返す。天井部には天井部を構成する複数の被覆(被覆2)が見られる。
H28	石室内 土上	窓櫓部 环甌	口縁 ~天井部			①灰褐色(2.5Y5/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に口縁に下降する。口縁端部は屈曲領域(腰)で膨らむ。外縁に直角に折り返す。天井部には天井部を構成する複数の被覆(被覆2)が見られる。
H29	石室内 土上	窓櫓部 环甌	天井部	つまみ棒2.6	①(2)灰褐色(2.5Y5/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に口縁に下降する。口縁端部は屈曲領域(腰)で膨らむ。	
H30	石室内 土上	窓櫓部 环甌	天井部			①深灰色(3.4/1) ②深灰色(3.4/2)	黒	やや不良	器種等の等しい側体で、外縁に部分的に半円形へ下削が施される。天井部の内側の資料。
H31	石室内 土上	窓櫓部 环甌	底~体部	高台径(9.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(9.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y4/1) ②灰褐色(2.5Y4/2) ③深灰色(3.4/1) ④深灰色(3.4/2)	黒	良好	底部端部の内や外側に断面方形の小ぶりな窓陣が付く。窓陣は内側で接続する。体部外縁に自然縫が複数有る。
H32	石室内 土上	窓櫓部 环甌	口縁 ~底部	①(14.2) ②(9.5) ③△L.A.	①(14.2) ②(9.5) ③△L.A.	①灰褐色(2.5Y3/1) ②灰褐色(NS)	黒	良好	平らな底盤の体部はやや焼き氣味に眞面目に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。
H33	石室内 土上	窓櫓部 环甌	口縁 ~底部	①△L.A. ②(14.4) ③△L.A.	①△L.A. ②(14.4) ③△L.A.	①灰褐色(2.5Y3/1) ②灰褐色(2.5Y6/1)	黒	良好	口縁部と底盤部に接合しないため、口縁や底盤が確定できない。底部の心臓部や中間に内側して立ち上がる。口縁端部は丸みを帯び、外縁は端押さる。
H34	石室内 土上	窓櫓部 环甌	底~体部	高台径(11.2) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(11.2) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y3/1) ②灰褐色(NS)	黒	良好	底平らな場所に外側に例え窓陣付く。高台部は内外とも肥厚する。体部は少し横たわる。窓陣は明瞭な斜面で左回している。窓陣の同一側面を見当たらない。同じ1個の窓。
H35	石室外 その他	窓櫓部 环甌	完形復元 可能	①(13.8) ②L.A. つまみ棒2.6	①(13.8) ②L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y6/1) ②灰褐色(2.5Y6/1)	黒	良好	底平らな場所に外側に例え窓陣付く。高台部は内外とも肥厚する。体部は少し横たわる。窓陣は明瞭な斜面で左回している。窓陣の同一側面を見当たらない。同じ1個の窓。
H36	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(13.2) ②△L.A. つまみ棒2.6	①(13.2) ②△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y3/1) ②灰褐色(2.5Y3/1)	黒	良好	口縁に沿して窓陣が早い側体で、斜面の天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H37	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部			①灰褐色(NS) ②灰褐色(NS)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H38	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部			①深灰色(2.5Y6/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H39	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(19.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(19.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(NS) ②灰褐色(NS)	黒	良好	口縁に沿して窓陣が早い側体で、斜面の天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H40	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(13.9) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(13.9) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(2)灰褐色(2.5Y5/1)	黒	良好	口縁に沿して窓陣が早い側体で、斜面の天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
Y2	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(13.1) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(13.1) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y5/1) ②灰褐色(2.5Y5/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
Y3	石室外 その他	窓櫓部 环甌	口縁部	①(13.6) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(13.6) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y3/1) ②灰褐色(2.5Y3/1)	黒	良好	口縁に沿して窓陣が早い側体で、斜面の天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H41	石室外 その他	窓櫓部 环甌	完形復元 可能	①(12.4) ②L.A. つまみ棒2.6	①(12.4) ②L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y5/1) ②灰褐色(2.5Y5/1)	黒	やや不良	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
Y4	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井部			①深灰色(2.5Y5/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H42	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部			①(2)灰褐色(2.5Y5/1)	黒	やや不良	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H43	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(13.8) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(13.8) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y3/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H44	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井 ~口縁部	①(13.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①(13.4) ③△L.A. つまみ棒2.6	①灰褐色(2.5Y5/1) ②灰褐色(2.5Y5/1)	黒	やや不良	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H45	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井部			①(2)灰褐色(2.5Y5/1)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
H46	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井部			①灰褐色(NS) ②灰褐色(NS)	黒	良好	底平らな天井部から腰や中間に内側して口縁に下降する。口縁端部は丸く、口縁端部は窓陣部に接し下削させる。口縁内面に斜面が多く複数ある。
V3	石室外 その他	窓櫓部 环甌	天井部	③△L.A.		①灰褐色(2.5Y5/1) ②灰褐色(NS)	黒	良好	シグマープロセス形状で、むき出しに反対された口縁が底部を以て垂直に下垂させる。底盤部の資料。

第1章 第128回の進行

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物 番号	遺物 種類	部位	法量(cm) ①口傳-②後縫-③裏縫	色調 ④外縫-⑤内縫	紡士	焼成	備考	
							縫合部	縫合部
H47	石器外 その他	頭部 耳垂	耳井 ～口縫部	③△1.45	②深灰色(NA/2) 口縫端部 灰色(NA/)	織	良好	縫平な耳井部からわずかに内側へ口縫に下ずる。口縫は外縫側に反対させた時に縫端部を屈曲させる。微ね後縫にて口縫外縫部が露出する。左耳垂の資料。
H48	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部	③△1.1	②深灰色(10Y7/1)	織	良好	口縫を外方に斜めに屈曲させる。縫端部は下垂させぐれめる。左耳垂の資料。
Y6	石器外 その他	頭部 耳垂	耳井 ～口縫部	③△1.2	②深灰色(NA/)	織	良好	縫平な耳井部の深緑な縫の接合部を複数け口縫縫端部を島縫で張りこする。山口県・山田山窯。
Y7	石器外 その他	頭部 耳垂	耳井 ～口縫部	③△1.45	②深灰色(IV/1)	織	良好	H48と同一の可能性が高い。口縫縫端部を島縫で張りこする。山口県・山田山窯。
H49	石器外 その他	頭部 耳垂	耳井 ～口縫部	③△1.3	②深灰色(IV/1)	織	良好	天井部のみ内側で口縫を張る。口縫縫端部は左耳に丸く取れる。左耳垂の資料。
H50	石器外 その他	頭部 耳垂付帯	底端 ～口縫部	高台墜(9.8) ③△1.2	②深灰色(IV/1) ②深灰色(IV/1)	織	良好	縫端部が丸く丸薙形の底端部に、断面形状の小さな高台が付く。右耳垂の合掌形の縫の内側が丸薙され、右耳垂。
Y8	石器外 その他	頭部 耳垂付帯	～全体	①およそ16.4	④深灰色(IV/1) ④深灰色(IV/1)	織	良好	縫の内側が丸く丸薙形。縫の口縫を矧ぐ反対し、縫端部は丸く收める。H49と全く同じ。山口県・山田山窯。
H51	石器外 その他	頭部 耳垂付帯	底～全体		④深灰色(IV/1)	織	良好	平底の底端部に高さの断面形状が残る。縫存部の全面に輪郭ナギが施される。右耳垂の資料。
Y9	石器外 その他	頭部 耳垂付帯	底部	高台墜(8.0) ③△1.5	②深灰色(IV/2) ②深灰色(IV/1)	織	良好	縫底部内側に断面形状の小なる高台が付く。右耳垂は内側で縫端部を丸薙する。山口県・山田山窯。
H52	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～底端	①(12.2) ②(5.4) ③△5	②深灰色(NA/)	織	良好	縫底部内側に断面形状の小なる高台が付く。右耳垂は内側で縫端部を丸薙する。山口県・山田山窯。
Y10	石器外 その他	頭部 耳垂	耳井	②(6.8) ③△1.3	②深灰色(V/1) ②深灰色(V/1)	織	良好	縫底部内側に断面形状の小なる高台が付く。右耳垂は内側で縫端部を丸薙する。山口県・山田山窯。
H53	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体		②深灰色(IV/1)	織	良好	わざひで外縫につづき立溝を認め、立ち上がる跡部で、口縫縫端部は丸く收める。ロウ引出物が明瞭に現れる。右耳垂の資料。
H54	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体	①およそ11.8	③深灰色(VT/1) 背面に黒絲 橙アラバターカラー (IV/3)	織	良好	シニアリニア形で、正面に黒絲の縫端部を開き、口縫縫端部は丸く收める。ロウ引出物が明瞭に現れる。右耳垂の資料。
H55	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		④深灰色(IV/1) ④深灰色(IV/1)	織	良好	内側気泡部に縫に立ち上がる。口縫縫端部は丸く收める。右耳垂の資料。
H56	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		④深灰色(VT/1) ④深灰色(VT/1)	織	良好	口縫縫端部は丸く收める。口縫縫端部は丸く收める。右耳垂の資料。
Y11	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体		④暗褐色(IV/2) ④濃褐色(IV/1)	織	やや不良	ロウ引出物で内側には丸く、側面に体部で、口縫が軽く外反する。右耳垂の資料。
H57	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体		②深灰色(VS/1)	織	良好	わざひで内側には丸く大なり、側面に体部で、口縫が軽く外反する。右耳垂の资料。
H58	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		②深灰色(NA/)	織	良好	口縫を軽く外反させ、縫面部を丸く收める。
H59	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		②深灰色(VS/1)	織	良好	口縫を軽く外反させ、縫面部を丸く收める。
Y12	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		②深灰色(NA/)	織	良好	外方に丸く開く体部である。口縫は軽く外反させ縫部を丸く收める。山口県・山田山窯の資料。
Y13	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体		②深灰色(VS/1)	織	良好	口縫を軽く外反させ、縫面部を丸く收める。山口県・山田山窯の資料。
H60	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫 ～全体		②深灰色(VS/1)	織	良好	縫端部が丸く收まる。縫面部を丸く收める。右耳垂の資料。
H61	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		②深灰色(NA/)	織	良好	天井部に丸く收まる縫端部を丸く收める。内側に高台部。くぼみは口縫部の底端部がある。右耳垂の資料。
H62	石器外 その他	頭部 耳垂	底端	③△1.9	②深灰色(VT/1)	織	良好	縫端部の底端部。体部は丸く開き立ち上がる。体部外面にロウカタマリの痕跡がある。右耳垂の資料。
Y14	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		②深灰色(VS/1)	織	良好	大きめに丸く開く縫端部で、始めて縫端部合倉からH47と同一個体である可能性がある。山口県・山田山窯の資料。
H63	石器外 その他	頭部 耳垂	体部	縫幅最大径(17.2)	①明褐色(7.3V6/3) ②褐色(7.2V4/3)	織	やや不良	縫幅の大きさが特徴的。縫幅が大きいものと縫幅が小さいものとを並べて縫合がされる。右耳垂の資料。
H64	石器外 その他	頭部 耳垂	底端	③△3.3	②深灰色(7.5V/1)	織	良好	平底から体部の外側に直進的に立ち上がる。右耳垂の資料。
Y15	石器外 その他	頭部 耳垂	口縫部		④深灰色(IV/6) ④深灰色(VT/1)	織	良好	天井に丸く收まる縫端部。内側部を丸く收める。縫端部は丸く收まるがかかる。山口県・山田山窯の資料。
Y16	石器外 その他	頭部 耳垂	縫端		④深灰色(IV/6)	織	良好	外縫は丸く收まっている。体部は平行引き抜き方式が採用されている。体部縫端部に同心円状の筋道が走る。右耳垂の資料。
Y17	石器外 その他	頭部 耳垂	縫端		④深灰色(IV/6)	織	良好	体部外縫に平行引き抜き方式を基に。内縫に同心円状で縫端部が丸く收まる。縫端部に底端部がある。H45と全く同じ。右耳垂の資料。
H65	石器外 その他	頭部 耳垂	縫端部	④深灰色(IV/6)	④深灰色(NA/)	織	良好	体部外縫に平行引き抜き方式を基に。右耳垂の資料。
H66	石器外 その他	頭部 耳垂	～全体	縫幅(20.4)	④深灰色(NA/) ～縫幅(20.4)	織	良好	縫幅内側に平行引き抜き方式。縫幅外側に工具が遺して残る。右耳垂の資料。
H67	石器外 その他	頭部 耳垂	体部		②深灰色(NA/) ②深灰色(NA/)	織	良好	H45と同一個体と見られるが、内縫に平行で底端部も丸く收まる。右耳垂の資料。
Y18	石器外 その他	頭部 耳垂	体部		④深灰色(IV/6) ④深灰色(IV/6)	織	良好	外縫は天井部が直進的に引き抜き方式で実施される。内縫は同心円で底端部も丸く收まる。山口県・山田山窯。

第II章 第128号坑の調査

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①印鑑②表面寸法高さ	色調 ①内面②外面	胎土	焼成	備考
H68	石室外 その他の 裏窓器 裏	裏窓器 裏	体部		①灰色(GV1/1) ②灰色(GV6/1)	黒	良好	内面下部は格子状き、上面は平行印字が施される。内面は同心円で具痕が現るが、上面はテグス状現れる。 新定名なし複合。
H69	石室外 その他の 裏窓器 裏	裏窓器 裏	体部		①黑色(NG1/1) ②暗灰色(NG1/1)	黒	やや不良	H15+H21+H67と同一個体と思われる。 新定名なし複合。
Y19	石室外 その他の 裏窓器 裏	裏窓器 裏	体部		①暗灰色(NG1/1) ②灰色(NG1/1)	黒	良好	H15+H21+H67と同一個体と思われるが、接合しない。 H15裏窓の資料。
H70	石室外 その他の 裏窓器 裏	裏窓器 裏	体部		①暗灰色(NG1/1) ②灰色(NG1/1)	黒	良好	体部内面に平行印字後断続的にカナヘビを施し、内面に同心円で具痕が現り、接合する形態。
H71	石室外 その他の 土師器 場	口縁 ～体部			③④或黃褐色(7.5YR8/3)	黒	良好	内面して口縁に沿ひ、口縁上端はわずかに削ませる。内面は乾燥させているようだが失火している。外面は横方向の細かなガタが現されている。内面は風化が激しく調整不良。 新定名なし複合。

表2 第128号坑出土遺物(鉄製品)観察表

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量は残存最大値()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重さ(g)	備考
H1	第12号坑 田土点不規	鉄刀	刀身部	①37②24③14.5④16.96	新定名無しの資料。
H2	第12号坑 履瓦層	鉄器	素面	①34.5②6③3.47	刀根部鉄器の素面。断面円形。 新定名無しの資料。
Y1	第12号坑 石室内地面	鉄刀	刀身部	①73②26③13.5④42.39	H1と同一個体か。 山15直立複合。
Y2	第12号坑 石室内地面	鉄器	素面か	①31②6.5③3.5④1.11	器の右辺は削落か。 山15複合の資料。
Y3	第12号坑 石室内地面	鉄器	素面	①33②4③3.7④0.8	末端鋸切。
Y4	第12号坑 石室内地面	刀子 鉄刀	素面	①41.4②16③7.1④9.06	刀頭は削成されておらず、刀子または鉄刀の头部と思われる。山15複合の資料。
Y5	第12号坑 石室内地面	刀子か	刀身部	①38②13③6.4④4.8	器の裏面は削落している。背は底面であるか不明。 山15複合の資料。
Y6	第12号坑 石室内地面	鉄片		①32②9③4.2④1.74	山15複合の資料。
Y7	第12号坑 石室内地面	鉄片		①16②12③4.3④1.54	山15複合の資料。
Y8	第12号坑 石室内地面	鉄片		①32②9③4.2④1.74	山15複合の資料。
Y9	第12号坑 石室内地面	鉄片		①31②6.5③3.5④1.11	山15複合の資料。

第III章 第137号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

第137号墳も、第128号墳と同様に古墳群西部域を調査の対象とした昭和36年(1961)に発掘調査の手が加えられている。第137号墳の出土資料は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されているが、上器類は主として萩博物館に、鉄製品は山口大学埋蔵文化財資料館にのみ收藏される。遺物袋に同封されている注記カードには、

【萩博物館】

- 萩①「見島ジーコンボ古墳群 137号 棚内 1961.9.3」
- 萩②「見島ジーコンボ古墳群 137号 南側棺外 1961.9.3」
- 萩③「見島ジーコンボ古墳群 137号 棚外 1961.9.3」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

- 山①「見島 137号 棚内北東部 1961.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.21)
- 山②「見島 137号 棚内中央部(人骨・鉄片) 1961.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.18)
- 山③「見島 137号 南側棺外 1961.9.4」(コンテナNO.34 袋NO.5)
- 山④「見島 137号」(コンテナNO.32 袋NO.23)

の7種が存在する。カードに記載された年月日から調査経過を復元すると、第137号墳の調査は昭和36年9月3日に着手され、同日に石室内の理積疊上の除去まで進行し、翌4日には終了したかに思われるが、『見島総合学術調査報告』には「調査の直前には4箇の天井石が違っていた」との一文があり、同書図版23「第137号墳発掘前状況および調査後の石室」(写真14)を見ると、発掘前状況にも関わらず天井石が除去されているため、前日の2日には作業(天井石除去)が行われていた可能性を残す。

ここでは、第137号墳の調査成果報告文と、調査時の写真(写真14~16)を転載する。

第137号墳 第128号墳の西方約6メートルの地点にある狹長な石室である。この古墳の石室は、浜塙面が床面になるように、側面を切り下げるで設けてある。石室が浜塙の上に据わるよう組まれているため、築造当時の積石の高さが1メートル戸数10センチはあつたと考えられる。調査の直前には4箇の天井石が違っていたが、いずれも石室の内部へ転落し、積石も周間に低く残存するにすぎなかった。

石室の方位はLS37°Wで、東西36.4センチ、幅50~65センチ、高さ65センチを測り、規模や形態はともに東隣の128号墳に類似しているが、幅がやや広い。奥右には1箇の自然石を組に用い、奥左は穴南側が1箇、北西側8箇が並んでいて、これらは径30~60センチの自然石を、1箇だけ縱に置くばかりはいずれも横に1重ないし2重に積んでその上に天井石を支し、入口を径10~30センチばかりの礫や小石塊でふさいだごく簡素な石室である(図版22下、23)。

床面は厚2~5センチばかりの円錐と鶴足からなる襖床で、奥へやや低く傾き、床面から須恵器の壺と蓋各1個、盤4個のほか、若手の鏡と土師器の蓋の破片少量や器形不明の鉄製品の小断片などを検出した。人骨の遺存場所は少なく、しかもそれらは四肢骨の小さな塊である。須恵器や土師器などの容器類は、他の石室と同様、入口から1~1.3mまでの範囲にまとめて副葬してあった。なおこの石室には瓦器に近い須恵質の土器が混っている。

須恵器片は50片。土師器破片少量。厚手の破片は外面に擦痕または平行条、内面に平行条または青泡波をのこすものである。薄手のものは細片が多く、被せ式の蓋が確実に存していたことがわかる程度である。(『見島総合学術調査報告』429頁)



写真14 第137号墳石室調査前(北西から)

参考文献7「図版23左 第137号墳石室調査前の状況及び調査後の石室」を転載



写真15 第137号墳石室調査後(北西から)

参考文献7「図版23右 第137号墳石室調査前の状況及び調査後の石室」を転載



写真16 第137号墳(南西から)

参考文献7「図版22下 第137号墳」を転載



写真 17 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区（東から）
※2009年5月撮影



写真 18 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区（西から）
※2009年5月撮影



写真 19 見島ジーコンボ古墳群第137号墳現況（南西から）
※2009年5月撮影

現在史跡公園として整備されている見島ジーコンボ古墳群西部域(写真17~19)において、第137号墳はシンボル的な存在となっており、各種広報物に画像が掲載される場合には被写体として選択される場合が多い。一方で発掘調査成果は芳しいものではなかったのか、『見島総合学術調査報告』においては、2ヶ年にかけて調査された全18基中、最も簡略と言える記述しか残されていない。また不可解なことに、当墳のみ石室実測図が掲載されていない。

そこで、萩市歴史まちづくり部文化財保護課に連絡の後、平成25年(2013)年7月24日から翌25日にかけて、資料調査に先立ち遺跡地での測量調査を実施し、平面図と立面図を作成した(図11)。

『見島総合学術調査報告』では、天井石は4石遺存していたとされるが、現状では5石で復元されている(南側1石は石室内に転落)。また「礎原面を掘り下げないで設けてある」とされる石室であるが、公園化に伴い盛土が施されたためか、側壁上部付近まで埋没している。

石室規模に関しては内部を測量できる状態にないため、報告通り長さ360cm、幅50~60cm、高さ65cmと理解しておく。構造的には、石の据え方や側壁を部分的に2段に積む点など第128号墳と類似点が多いが、側壁に用いられた石材を見ると、第128号墳が長さ50cm内外の石を主として使用しているのに対し、第137号墳では長さ70~80cmと一回り大きな石材を使用しており、石室規模も第128号墳に比して一回り大きい。古墳群西部域に分布する他の石室と比較しても、敢えて「狭長」という言葉を用いて当石室の特徴を述べる必要はないよう感じられる。主軸の方位に関しては、S37°Wとされ、第128号墳より大きく西に振っている。

2~5cmの凹凸と腐植土からなる疎床で、奥壁へ向けて低く傾斜するという床面(写真15・16)は現地で確認することができなかつた。

【注】

- 1)時間の制約および機材の選択上、図に標高を入れることはできなかつた。
- 2)今回の測量によると、奥壁から側壁開口部第1石までの距離は約400cmである。

第2節 第137号墳の出土資料

第1項 土器類

第137号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されているが、前者の所蔵は100片を超え、後者の所蔵は11片に過ぎない。今回の調査で両者の所蔵資料が接合した場合は、萩博物館に収蔵していくことになった。

前述の通り、遺物の注記カードは7種が存在する。第128号墳同様、石室内出土土器(萩①)と石室外出土土器(萩②・③、山④)が接合した場合は、元來石室内に存在した可能性が高いことから「石室内出土」とした。『見島総合学術調査報告』では第137号墳出土資料が図示されていないため、文中にある「床面から須恵器の壺と蓋各1箇、復4箇のほか、若干の破片と土師器の壺の破片少量」がいずれの資料に該当するのか不明である。

石室外資料に関しては、「南側棺外」と「棺外」の2種が存在するものの、本稿では「石室外出土」として一括する。

『見島総合学術調査報告』には「須恵器は50片」との記述があるが、今回確認した点数はそれを大きく上回る。遺物の所属に多少の不安が残るが、以下に各個体の概要を記す。



图 11 第 137 号 墓室实测图

【石室内出土】(図12・13、写真20~22、表4)

須恵器には壺、壺蓋、壺瓶頸、甕が、土師器には壺が存在する。

H1は須恵器壺蓋。つまみ部片と口縁へ天井部片は接合しないが、胎上、調整、焼成具合から同一個体と判断する。扁平な天井部から屈曲気味に口縁に下降し、口縁は強く外反する。口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。天井部中央にはやや高めのボタン状つまみが付く。口縁部とつまみのみ回転ナデ、他はナデが施される。H2も須恵器壺蓋。口縁の1/4のみ遺存している。器形や調整はH1と同様であるが、別個体である。焼き歪みが著しい。H3~H4も須恵器壺蓋。いずれも口縁へ天井部片であり、扁平な天井部を有す。H3はH1・2に比して天井へ口縁境界の屈曲や口縁の外反が弱く、口縁端部も丸みを帯びる。端部外面に掛かる自然釉は、重ね焼かれた状況を示す。外面は口縁部のみ回転ナデが施されるが、内面は大井部に及ぶ。H4の形状はH3同様であるが、口縁のつくりがシャープで、端部の下垂も短く鋭い。小片であるが焼き歪んでいることが分かる。調整もH3同様である。H5はさらに屈曲・外反が弱まり、天井部からなだらかに口縁に下降する。口縁端部はやや鳥嘴状で、やや外方に下垂させる。調整はH3・4と同様である。

H6は須恵器壺。完形復元が可能な資料である。器壁の薄い個体で、無高台の平底から体部が開いて立ち上がる。口縁端部は丸く收める。体部外面下端に回転ヘラ削りが施される。体部には内外面とも回転ナデ、底部は内外面ともナデが施される。H7も須恵器壺。ロクロ水引き痕が明瞭に残る体部は大きく開き、口縁はわずかに内傾する。口縁端部を丸く收める。内外面とも回転ナデ調整を施す。H8はここでは上師器壺として報告するが、ロクロ水引き痕が明瞭に残り、器壁が薄く、胎上も須恵器的である。上師質焼成であるが須恵器の焼成不良品の可能性が高い。口縁の約1/4が遺存する。内外面とも回転ナデ調整が施される。

H9~H11は須恵器壺瓶頸。H9は接合しない萩①3片から図上復元を行った。算盤珠状の体部を有する壺で、頭部径は6.5cmに復元される。長頭壺と見られる。体部外面は下位までカキ目が施され、腰上位には灰が多く被る。内面は全面丁寧な回転ナデが施されている。法量に比して器壁がやや分厚い。H10も長頭壺と見られる、頭部付け根で折損した肩部片。外面にはカキ目、内面には回転ナデが施される。H9に比して器壁が薄い。なお、出土資料中に壺の底部もしくは高台の破片は存在しなかった。H11は小片であるが、外面に施されたカキ目から径を復元すると壺類にはならないようである。平瓶であろうか。器壁は分厚く、外面にはカキ目およびカキ目原体を使用したと思われる縱方向の調整痕が観察される。内面には同心円当て具痕が残る。

H12~19は須恵器甕。H12は接合しない2片から図上復元を行った。頭部を欠失した肩部片で、外面に平行叩きが施され、内面に同心円当て具痕が残る。外面頭部付け根付近に緑色の自然釉が掛かる。同一個体と見られる破片が多数存在するが、接合しない。H13も頭部付け根で折損した甕の肩部片。H12に比して器壁が厚い。外面に平行叩きおよびカキ目が施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。外面には灰と自然釉が多量に掛かる。H14は甕の頭一肩部片。外面には横方向の平行叩きが施されるが、頭部付近はナデが施される。内面も叩き部には同心円当て具痕が残り、上位はナデが施される。外面は灰を多量に被っている。石室外出土の須恵器甕口縁部H24と同一個体の可能性があるが、接合しない。H15~H19は体部片。詳細は観察表を参照いただきたいが、第137号墳出土の須恵器甕は、内面の当て具痕のナデ消しが図られた個体が目立つ(H18・19)。外面に格子叩きが施された個体は確認できなかった。

H20は上師器壺。平底の底部片で、H8を除外すると出土資料中唯一の上師器である。

樂山市 第137号墳出土器物

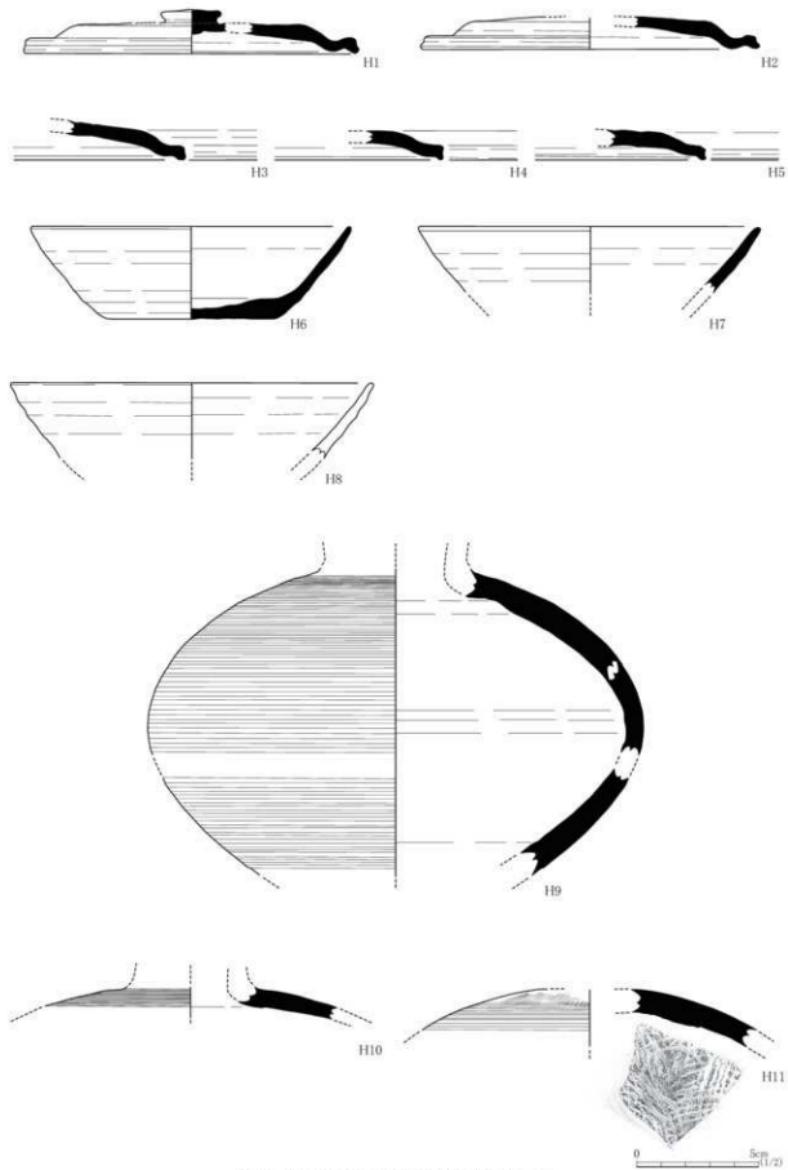


図 12 第137号墳 石室内出土土器実測図①

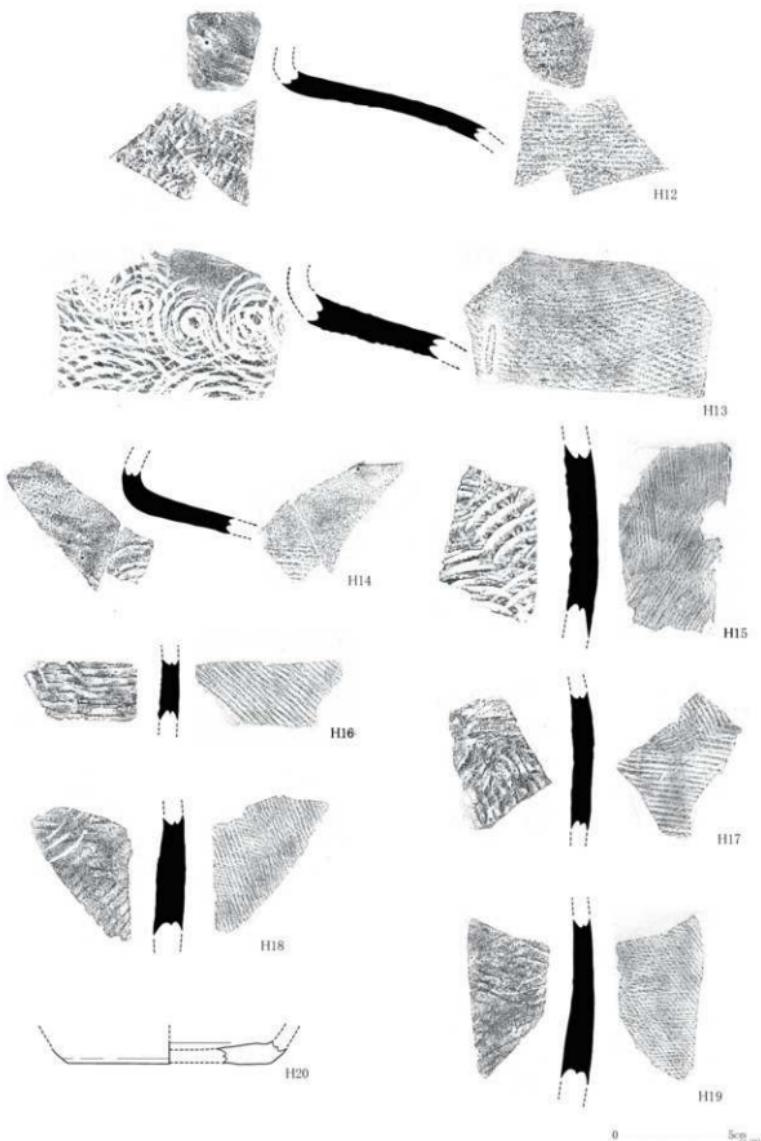


図 13 第137号墳 石室内出土土器実測図②



写真20 第137号墳石室内出土土器①



写真21 第137号墳石室内出土土器②



写真22 第137号墳 石室内出土土器③

【石室外出土】(図14、写真23、表4)

國化可能資料はごく少量であり、全て須恵器で、器種には壺、壺蓋、甕が存在する。

H21は壺蓋の天井一口縁部片。石室内出土資料同様、扁平な天井から下方に強く屈曲させ口縁部を形成する。口縁の外反も強く、端部はやや外方に下垂させる。口縁部のみ内外面回転ナデ調整が施され、天井部上面はナデ、内面は不定方向のナデが施される。H22も壺蓋天井一口縁部片。第137号墳出土資料中では胎土が精緻な個体である。天井部から緩やかに内湾して口縁に至る。口縁端部は短く下垂させ、接地部に面を取る。遺存部は全面回転ナデ調整が施されている。H26は輪状つまみを有する壺蓋の天井一口縁部片。つまみ端部と口縁端部を欠失する。比較的器壁の厚い個体で、平らな天井部からやや屈曲気味に口縁に下降する。口縁はわずかに外反している。外面は天井部まで回転ナデ、内面は口縁部のみに回転ナデが施されている。

Y1は壺の口縁一体部片。内湾気味に大きく開く体部を有し、口縁端部を丸く收める。マクロ水引き痕が明瞭に残る。H17と同一個体の可能性もあるものの、接合せず、色調も微妙に異なることから別個体として掲載する。残存部内外面とも回転ナデ調整。

H24～H27、Y2は窓。H24は大きく外反する口縁部片。口縁部片は丸く收め、外端をわずかに肥厚させる。口縁外面中位には弱い段が形成されているが、意図的なものではないと思われる。口縁内面に自然釉が掛かるため、調整は観察できない。外面には回転ナデが施されている。窓部片は数多く存在するが、ここでは特徴を示すにとどめる。石室内出土資料同様に、外面の叩きは平行叩きに限られるものの、叩き目には細粒がある。内面は同心円当て具痕と平行当て具痕が存在する。当て具痕のナデ消しが図られた資料(H26・Y2)が目立ち、中には完全にナデ消されたもの(H27)も存在する。器壁の厚みが異なるものが混在することから、大型窓と中型窓が存在した可能性がある。

第137号墳は、西部域東部に密集して築かれた墳墓群の西端部に位置するため、棺外出土品も当墳の副葬品であった可能性が高い。石室内、石室外出土の須恵器窓部片の特徴が共通していることも、その可能性を強く示唆している。ただし、既刊報告書に指摘したことであるが(横山・松浦2012)、古墳群西部域の石室に須恵器大型窓を副葬する空間は想定しがたく、墳墓に供献されたとすれば破砕行為が伴っていたものと想像される。

第2項 金属器類

金属器類としては鉄製品のみが存在し、全て山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている。『見島総合学術調査報告』には「末面から(中略)器形不明の鉄製品の小断片などを検出した」という文が見られるが、山①「見島 137号 棺内北東部 1961.9.3」という注記カードとともに鉄製品1点(Yi1)が、山②「見島 137号 棺内中央部 1961.9.3」という注記カードとともに鉄製品10点(Yi2～Yi11)が存在することが明らかとなった。

【鉄製品】(図15、写真24・25、表3)

Yi1とYi2は接合しないが同一個体の可能性がある資料である。図上左辺は断面三角形状に狭められているが明確な刃部は見られず、刀子莖部の可能性がある。

Yi3～Yi11は鉄片。いずれも小片であり、刀子や鉄鎌など小型品の断片と思われる。これら鉄製品の総重量は8.31gを量る。

以上に第137号墳出土資料の概要を記述した。古墳群の西部域石室に絶じて言えることであるが、当墳は地表に構築された石室ということもあってか、後世の盗掘が横行したようで、遺物の残存状態が極めて悪い。その中でも、本書で石室同とともに出土した土器29点、鉄製品11点を報告できたことは、僅かながらの成果と言える。

残された数少ない資料から当墳の埋葬時期に言及するならば、坏および坏蓋形態を根拠として、8世紀代に遡らせるることはやや困難に感じる。大きく開く坏や扁平な坏蓋、輪状つまみの存在から9世紀前半から中頃を想定したい。

第四章 第137号墓发掘报告

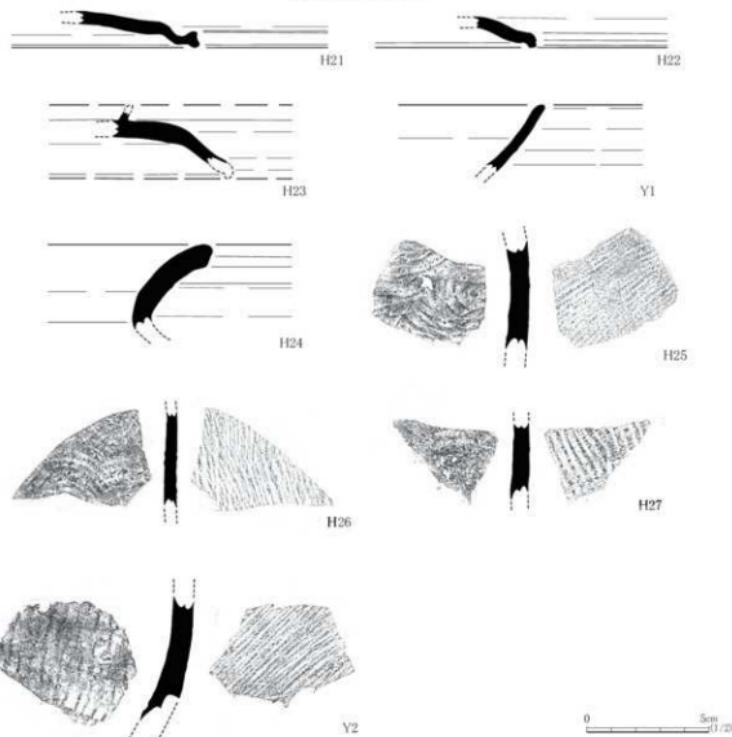


图 14 第 137 号填 石室外出土土器实测图

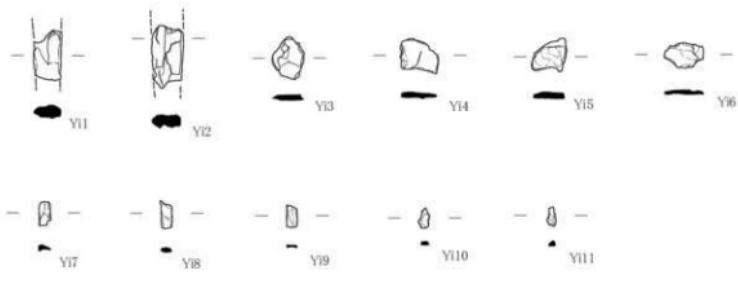


图 15 第 137 号填 石室内出土铁器实测图

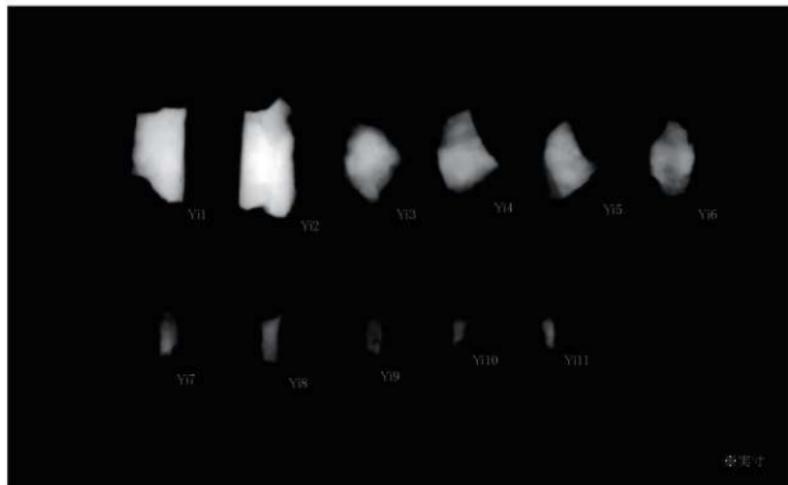


写真 23 第 137 号墳 石室外出土土器



※ほぼ実寸

写真24 第137号墳 石室内出土鉄製品



寸 寸

写真25 第137号墳 石室内出土鉄製品 X線画像

表3 第137号墳出土遺物(鉄製品)観察表

遺物 番号	遺物 種類	種類	部位	法量 (小形:1.0mm×中形:2.0mm×大形:3.0mm)手重(㌘)	備考
Y11	石室内北東部	刀子	素面か	130.5 ②11.8 ③5.4 ④2.18	古刀形の複数枚。素面片と見られる。
Y12	石室内中央部	刀子	素面か	135.5 ②12.3 ③3.9 ④3.8	明確な刀形は確認されず、素面片と見られる。Y11と同一個体か、古刀形体の資料。
Y13	石室内中央部	鉄片		135.5 ②12.3 ③3.9 ④6.8	古刀形の複数。
Y14	石室内中央部	鉄片		135.5 ②12.3 ③3.9 ④6.75	古刀形の複数。
Y15	石室内中央部	鉄片		135.5 ②12.3 ③3.9 ④6.67	古刀形の複数。
Y16	石室内中央部	鉄片		136.1 ②10.3 ③3.4 ④6.51	古刀形の複数。
Y17	石室内中央部	鉄片		139.8 ②14.4 ③1.5 ④6.09	古刀形の複数。
Y18	石室内中央部	鉄片		131.1 ②14.8 ③3.5 ④6.12	古刀形の複数。
Y19	石室内中央部	鉄片		138.7 ②14.0 ③1.8 ④6.06	古刀形の複数。
Y20	石室内中央部	鉄片		137.7 ②14.2 ③1.8 ④6.04	古刀形の複数。
Y21	石室内中央部	鉄片		137.9 ②13.6 ③1.6 ④6.06	古刀形の複数。

表4 第137号墳出土遺物(土器)觀察表

萩①～③、山①～④の注記は35頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺傳子番号	遺傳子部位	器種	部位	法則(cm)			色調 外表面 内表面	胎生	焼成	備考
				①口唇部	②口唇部	③口唇部				
H1	石室内	前唇部 耳垂	天井部 ～口唇部	①△1.80 ②△1.8 ③△2.25	①灰褐色(4/V-7) ②灰褐色(IV-VI-1)		画	良好	つまみ脚と天井部～口唇部は接合しないが、船上、腰帶 後、足具合も小一回一個例と判別、最平な個体で天井部の心臓 の複数を有する。組合せは、口唇部端は扁盤型に下垂させる。 天井脚部中央にボタン状つまみを有する。 表「新」表「複合」。	
H2	石室内	前唇部 耳垂	天井部 ～口唇部	①△1.60 ②△1.3	③△2.25	①灰褐色(2/V-5/V-1)	画	良好	扁平な個体で天井部から心臓の複数を有する。口唇端部は 舌端部で組合せで張り立てる。腰帶きみを有する個体。 表「新」表「複合」。	
H3	石室内	前唇部 耳垂	天井部 ～口唇部	④△1.6	①灰褐色(4/V-7) ②灰褐色(2.5/V-1)		少少相	良好	扁平な個体で天井部から心臓の複数を有する。口唇端部は 丸みを有する。頭部外側は自然端が少くついており、黒斑模様 などがあるが、前唇部の個体。	
H4	石室内	前唇部 耳垂	天井部 ～口唇部	④△1.2	①暗褐色(3/V-7) ②灰褐色(2.5/V-1)	③△2.25	画	良好	形相が複雑で天井部から心臓の複数を有する。腰帶きみを 有している。表「新」表「複合」。	
H5	石室内	前唇部 耳垂	天井部 ～口唇部	④△1.2 ①△1.2	②灰褐色(4/V-7) ③△2.25	④△2.25	画	良好	天井～口唇部の複数は低い。口唇端部は舌状に下垂させ る。表「新」表「複合」。	
H6	石室内	前唇部 耳	完形輪 可動	①(1.8) ②△2.0 ③△1.8	④△2.25	⑤△2.25 ⑥△2.25 ⑦△2.25	少少相	不良	腰帶模様の平底端が強烈で立ち上がる。口唇端部は舌くつく る個体。体部外側は舌端部で組合せが施される。 表「新」表「複合」。	
H7	石室内	前唇部	～体部	①(14.0)	②△2.25	③△2.25	画	少少不良	大口、圓形の口輪はねじらずに正面にする。口唇端部は舌く くめる。コロニヤは引出される。表「新」表「複合」。	
H8	石室内	上唇部 耳	口輪 ～体部	①△1.80	②△2.25	③△2.25	画	良好	腰帶模様は舌くくめる。コロニヤは引出される。表「新」表「複合」。	
H9	石室内	前唇部 長頭骨か	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	複合なし。口唇から天井部へ腰帶模様の骨突を有する個 体で、頭部端部は舌くつくらる。長頭骨でうろこ、尾部は平 底まで舌くつきを施す。	
H10	石室内	前唇部 長頭骨か	耳部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H11	石室内	前唇部 耳垂	耳部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H12	石室内	前唇部 耳	耳部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H13	石室内	前唇部 耳	耳部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H14	石室内	前唇部 耳	耳～背面	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H15	石室内	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H16	石室内	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H17	石室内	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H18	石室内	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	腰帶模様の骨突を有する個体で、頭部端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H19	石室内	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②灰褐色(2.5/V-2) ③△2.25	画	良好	H18と同一個体。耳部は同じ口唇当面部の個体で、平行で舌 くつくらる。ナゲナゲが施され、表「新」表「複合」。	
H20	石室内	上唇部 耳	近部	②△1.5 ③△1.8	④△2.25	⑤△2.25	画	良好	平底の個体で、体部端部は舌くつくらる。ナゲナゲが施され る。表「新」表「複合」。	
H21	石室外	前唇部 耳垂	天井 ～口唇部	④△1.5	①△2.25	②△2.25	画	良好	腰帶模様は天井部から頭部へ腰帶端部は舌くつくら る。腰帶模様は舌くつくらる。表「新」表「複合」。	
H22	石室外	前唇部 耳垂	天井 ～口唇部	④△1.25	①△2.25	②△2.25	画	腰帶模様	天井部～腰帶部は舌くつくらる。腰帶模様は舌く くめる。表「新」表「複合」。	
H23	石室外	前唇部 耳垂	天井 ～口唇部	④△2.25	①△2.25	②△2.25	画	良好	天井部に腰帶模様がある。腰帶模様と口唇端部を欠失 する。表「新」表「複合」。	
V1	石室外	前唇部 耳	口輪 ～体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	良好	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	
H24	石室外	前唇部 耳	口輪部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	良好	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	
H25	石室外	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	良好	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	
H26	石室外	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	良好	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	
H27	石室外	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	良好	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	
V2	石室外	前唇部 耳	体部	解剖最大径(20.3)	①△2.25	②△2.25	画	少少不良	内胸端部に大口、開口部で、体部は口唇端部で舌くつくら る。ナゲナゲが施され、腰帶模様は舌くつくらる。山(3)個体の資料。	

第IV章　まとめ

平成25年度から翌26年度にかけ、見島ジーコンボ古墳群第128号墳および第137号墳を対象に、当館所蔵資料と萩博物館所蔵資料と合わせ出土品の悉皆調査を実施した。本書はその調査成果報告である。

昭和36年(1961)に実施された見島ジーコンボ古墳群西部域の発掘調査は、10基を対象に行われた。これまで第151号墳から第156号墳までの6基から出土した資料を報告(横山2011、横山・松浦2012、横山2013)しており、これで残すところ2基(第123・124号墳)となつた。古墳群西部域を総括する時期が近いこともあり、ここで安易な考察を行うことを控えるが、今回対象墳の埋葬時期にだけ軽く触れておく。

第128号墳に関しては、出土品をどこまで「元来石室内にあった」と見なすかにより評価が分かれる。ただし、今回「床面」または「石室内表土」として報告した資料だけでも時期差が大きく、一部にやや古手の須恵器壺M128H8などが存在しながらも、筆者は主に須恵器壺蓋の形態から初葬時期を8世紀の前半に考えており、9世紀中頃まで複数回にわたり追葬が行われたと理解している。

第137号墳は資料が少ないと推定づらいが、こちらも須恵器壺蓋の形態から9世紀の前半から中頃の時期を推定しておく。

最後に、『見島総合学術調査報告』における第137号墳石室実測図の欠落について言及しておく。昭和36年の見島総合学術調査考古班は、斎藤忠、小野忠熙内氏を調査員に、本学助手1名と本学生5名を助手として調査を実施している。調査期間は8月29日から9月5日の8日間であることから、8日の内に10基もの石室を掘り上げたことになる。また、現在でこそ萩市浜崎港から見島本村港まで高速船「おにようす」で1時間10分の航行であるが、当時は昭和34年(1959)に就航した萩市営「見島丸」での航行で、航行時間は2時間30分であったと聞く。山口市から萩市への移動時間や調査器機など荷物の運搬を考えると、調査初日と最終日における具体的な調査を行うことは困難だった想像される。

現在残されている古墳群西部域石室出土の遺物注記カードから当時の調査日程を確認すると、表5のようになる。最も早い日付は9月1日で、調査が終了しているはずの9月6日の日付を持つ第123号墳の遺物1袋を除くと、事実上の掘削調査終了は9月4日であったことが分かる。特に後半期の9月3日と翌4日は、少なくとも5基に対して掘削または遺物の取り上げ作業が行われていることになり、測量作業を含めると、当時のスタッフ8名の労力はいかばかりかと、頑が下がる思いである。

さて、問題の第137号墳石室平面図であるが、結論から述べると「測量が行われなかった」のではないからとする。理由としては、まず当館に所蔵される石室トレース図に、練習・下書き用を含め第137号墳の石室図が存在しないことが挙げられる。報告書編集過程で図が削除されたならば、トレース図は存在しても良さうなものである。さらには、真正撮影写真(本書写真15)の掲載である。『見島総合学術調査報

表5 昭和36年(1961)見島ジーコンボ古墳群調査日程

昭和36年(1961)	8月29日(水)	8月30日(木)	8月31日(木)	9月1日(金)	9月2日(土)	9月3日(日)	9月4日(月)	9月5日(火)	9月6日(水)	石室実測図
第123号墳							●		●	○
第124号墳						●	●			○
第128号墳				●	●	●	●			○
第137号墳						●	●	●		
第151号墳		●								○
第152号墳		●								○
第153号墳				●	●	●				○
第154号墳				●	●	●				○
第155号墳				●	●	●		●		○
第156号墳										○

※遺物出土状況入り

告】に掲載された写真を見ると、古墳群西部域の調査では、石室正面または後方、もしくは斜めから低い位置で撮影が行われている場合が大多数であり、第137号墳の真正撮影は異質と言える。おそらく、前述した過密スケジュールが原因となり、出土遺物が貧弱であった第137号墳の優先順位が下がり、報告書では真正撮影写真で代用、または写真から図を起こすことが決定されたものと想像される。

報告書においてBII類とされた石室は少數であり、是非とも正確な内部構造が知りたいものであるが、遺跡地の現状では不可能である。山口県および萩市の今後の動向に期待したい。

【註】

①『見島総合学術調査報告』388頁による(斎藤・小野1964)。一方で同書の凡例には「8月31日～9月6日」となっている。

平成25年(2013)夏、見島ジーコンボ古墳群第137号墳の測量のため現地に赴く前に、見島総合学術調査考古班の責任者の一人であった斎藤忠氏の訃報に接し、遺跡地にて半世紀の時の流れを実感することとなった。末筆ながら、調査と基礎報告の労に対し感謝の意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りする。

【参考文献】

- 池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」、池田善文(編)『長亞鋼』Ⅱ・美東町文化財調査報告第5集、美祢(山口)
- 池田善文(2004)「集成 猿恵器」、山口県(編)『山口県史』資料編考Ⅱ、山口
- 市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」、海の言語を考える会(編)『海の古墳を考えるI 群衆墳と海上集同一発表要旨』、北九州(福岡)
- 小川富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」、史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号、萩(山口)
- 国守進「山口の見島」、萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻、萩(山口)
- 桑原邦彦・池山善文(1981)「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」、國際考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器一編年と集成』『周陽考古学研究』第3号、光(山口)
- 斎藤忠・小野忠烈(1964)「考古の郷」、山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』、山口
- 佐藤雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」、萩市史編纂委員会(編)『萩市誌』、萩(山口)
- 中村徹也(1984)「特別講演」ジーコンボ古墳群から見た見島(上)、史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号、萩(山口)
- 中村徹也(1985)「特別講演」ジーコンボ古墳群から見た見島(下)、史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号、萩(山口)
- 中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」、萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻、萩(山口)
- 糸安和一・三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』、山口県教育委員会(編)、山口県埋蔵文化財調査報告第73集、山口
- 長谷川道隆(1975)「青銅にかくされた歴史—見島出土の唐宋五代越州青銅片—」、史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号、萩(山口)
- 西田直・弘津史文・小川五郎・三室宗悦・岸川徳義(1927)「阿武郡見島文化の研究」、山高郡土史研究会(編)『山高郡土史研究参考考古学研究報告書一合意社第一』、山口
- 松下泰平・分部哲秋・伊熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」、山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集、山口
- 松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨—山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料一」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内調査研究報告』第4号、山口
- 三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」、日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14卷第3号、東京
- 山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳山・遺物 特に口器について」、日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25卷

第8号、東京

横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1、山口大学埋蔵文化財資料館(編)、山口

横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2、山口大学埋蔵文化財資料館(編)、山口

横山成己(2012)『見島ジーコンボ古墳群「作因墓說」小考』、「やまぐら学」推進プロジェクト(編)『やまぐら学の構築』第8号、山口

横山成己(2013)『見島ジーコンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3、山口大学埋蔵文化財資料館(編)、山口

渡辺一雄ほか(1983)『生産演替分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第71集、山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編)、山口

館藏資料調査研究報告書4
見島ジーコンボ古墳群
第128・137号墳出土資料調査報告

平成27年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

